

小田原史談

第 198 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

語りついで平和を考える

鳥居 泰一郎

一、法律文化社発行の『アクター発の平和学』(小柏葉子・松尾雅嗣編著)という本がある。戦争の問題、ジェンダーの問題、核兵器の問題、環境の問題等々基本的には問題と課題に焦点を当てて議論するものだったが、この書物は、課題を克服する主体、アクター(行為主体)に焦点を当てることによって、平和に関わる問題とその解決に新たな光を当ててることを意図している。「何が」ではなく「誰が」を問題にしているのである。

この第五章「地方自治体」の中で中平井一臣氏は、「多くの戦跡や戦争にまつわる史跡が各地に存在する。過去の偉人を顕彰するといった類の史跡保存は、全国各地の自治体に見られるが、戦跡や戦争にまつわる史跡は積極的に保存している自治体はあ

まり多くない。」と述べている。小田原市は、このあまり多くないアクター(自治体)の一つと言えよう。それは「蓮上院裏外郭土塁」の中にある「太平洋戦争による爆弾投下の跡」が史跡とされているからである。

二、昭和二十年八月十三日午前中の、アメリカ艦載機による攻撃については、後に「戦時下の小田原地方を記録する会」(代表飯田耀子)が、当時新玉国民学校に勤務していた二人の職員の手記をまとめている。

昭和二十年は、私は父と姉を家に残し、母と弟たち四人で上曾に疎開していた。家が爆心の学校使丁室から、校舎をはさんで約二百米ぐらいの位置にあったが、その時の状況は後に父親から聞いただけである。戦争が終わって、再び新玉小学校に転校して、破壊された校舎の手伝いをさせられながら、改めて一個の爆弾の威力を感じたものである。

小田原市が地方自治体として、また、「戦時下の小田原地方を記録する会」が団体として、アクターとして平和を追求しようとしていることは、誇れることである。

三、この度、アクターとして最も小さな単位である個人、小田原史談会員の譲原良二氏が『大東亜戦争による小田原城土塁に爆弾投下の跡』という十一頁の小冊子をまとめている。

冊子には、戦跡の所在を示す地図、写真を入れ、説明板の写しも印刷されており、たいへん良い資料である。

譲原氏は、この他にも『沼代プロペラ墓標』という鹿兒島出身の上原飛行士の戦死の様子を八頁にまとめた小冊子や『戦闘機・不時着』という昭和十九年五月、練習中の戦闘機が小八幡の海岸に不時着した様子を絵と短文でまとめた十一頁の小冊子、『僕の昭和二十年・夏・秋』という、これも絵と文章による三十七頁にわたる小冊子を自作されている。

『僕の昭和二十年・夏・秋』の小見出しを参考までに紹介し、平和を希求する資料として活用される様お願ひしたい。

- ・ 僕の家の近くに、アメリカ軍の小型機・爆弾投下
- ・ その日、拾った破片
- ・ 戦時下の学童生活
- ・ 勉強よりも作業が優先
- ・ 学校の帰りに機銃掃射
- ・ 隣の斉藤さん宅へ機銃弾
- ・ 小型機来襲・爆弾投下
- ・ 酒匂海軍水路部
- ・ 日本軍の実弾射撃
- ・ 敗戦直後、アメリカ軍、酒匂に駐屯
- ・ 私の大東亜戦争観
- ・ あとがき

同氏の小冊子については史談会会員名簿「千代」地区を見て、直接ご本人に連絡していただきたい。

四、譲原氏の活動は、地方自治体としての行為がやや風化していく時期に誠に有意義である。

新玉国民学校が爆撃を受けた

寄稿

空襲、そして母は

山田利治

小田原市立第二中学校(現白鷗中学校)第一回入学式は爆撃の後も生々しい、新玉小学校の講堂だった。生涯忘れられない体験を思い出させてくれた。

昭和二十年(西)八月十三日、朝早くから空襲警報が発令され、母は先に押入れの中へ避難していた。私と兄は、窓から外をこわごわと眺めていた。

そのうち、飛行機の爆音と大きな破裂音がしたので、私達も押入れに飛び込んだ。

どの位たったのだから。気を失っていたので何が何だか真つ暗の中で、分からない。どうなっているかと、少しづつ体を動かしているうちに、埋まっている土砂から何とか抜け出せた。兄も自力で土砂の中から這い出てきた。直ぐ母のことが気になった。いない! 薄明かりの中でよくよく見ると、母は逆さまに埋まっているらしく、青白い足だけが二本土砂の上から出ている。母は逆さまに埋まっている。これは大変なことだと直感した。兄と私は、満身に力を込めて引つ張った、動かない。土と

泥をどけても体に柱や家具が乗っていて、子供の力では取り除けない。

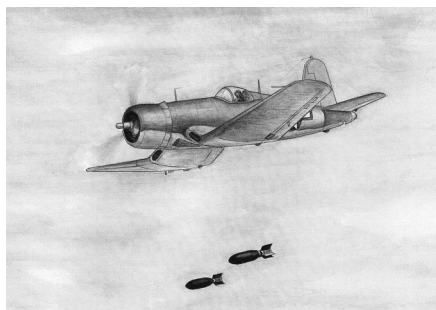
帯が出てきたので二人で思いつき引つ張ったら切れてしまった。早くしないと母は死んでも息ができることが先決と考え、夢中で小さな穴を口と鼻まで掘ってから待つてくれよと救援を求めに。近くの川に先ず逃げ込んだ。しかし未だ米軍機は飛び回っており、身動き出来ないまま警報解除を待つしかなかった。長い時間が過ぎていった。お袋、頑張ってくれ!

母は助け出されたが、長い時間逆さまに埋まっていたので、顔は大きく腫れ上がり、髪の毛は血に泥に染まって垂れ下がっており、とてもこの世の人とは思えなかった。

爆弾は私の家の真横、六、七メートル先の小川の向こうに落ちたから、私達が飛び込んだ押入れの前の畳は、大きな破片でスッパリ切れ、床を貫通し大きな穴が開いていた。あと一、二メートル近くに落ちていたら、

親子三人吹っ飛んでいたことだろう。東側の二軒長屋の家はバラバラに壊れ、更に隣の家は縦に二つに割れ、並びの大きな家は、柱が全部倒れ、屋根がふわっと乗っかっていた。

母は病院に行ったが、入院は出来ず帰ってきた。歩くことも、体を動かすことも大変で、頭も四針縫う傷で、どうなることかと心配であった。私も時間が経つにしたがつて体が締めつけられる様な痛みがでてきた。更に悪くなるかと心配であったが、幸いそれ以上のことは無かった。



新玉小学校を爆撃したヴォオトF Uコルセア艦上戦闘爆撃機 譲原良二氏画(提供)

更に!
取り合えず中島の親戚に身を寄せた二日目の夜、八月十五日午前一時、あの歴史的な、太平洋戦争最後の爆撃、小田原大空襲に遭遇した。

また逃げるはめになってしまったが母は歩けない、兄と二人でリヤカーに乗せて走りだした。頭の上に焼夷弾が音を立てて落ちてきた。その時リヤカーが故障しどんなに引つ張っても動かない。絶体絶命、二人して母に取りすがり逃げずに、子供心に覚悟を決めた。

飯泉橋あたりの空から焼夷弾が投下され、北西の風に乗ってキラキラ光りながら、市内の中心部に落ちていった。ああ良かった、これで助かった、と神に感謝した。(市内の被災者には申し訳けなかったが)

この空襲は熊谷、伊勢崎方面の爆撃を終えて硫黄島にかえるB29編隊の一機が残った焼夷弾を小田原上空で捨て去ったのだった。

この空襲で小田原の中心街ともいえる幸一丁目(宮小路界隈)、幸四丁目(千度小路界隈)、万年三丁目(高梨町界隈)、万年四丁目(青物町、一丁目界隈)など商店、歓楽街の八ヘクタールが焦土と化した。

被災戸数は四百二戸、被災住民は一、八四四人にのぼった。そして小田原中心街の人達は未明の爆撃でまだ余燼のくすぶる中で終戦の玉音放送を聞いたのだった(『西さがみ庶民史録』第二

七号)。

母の体が良くなつて暫くたち、引越したがこれが始まりで、次から次へと一年の間に七回も引越した。山王に行つてからようやく落ち着くことが出来た。親とは有り難いもので、子供に不自由な生活をさせまいと少しでも良い条件の家を探してくれたんだと思う。

その間、戦地に行つた長男は戦死、次男は行方不明、親にして見ればこれほど辛い時期はなかったと思う。うち沈んでいる暇も無かつたのか泣き顔一つ見せず、戦後の立ち直りのために働いてくれた。

私の周りには、もともと小田原の住人はいたものの、戦災者、引揚者、疎開者、多くの人達と助け合つて、今日に至っていることを忘れてはならない。

二中卒業の前に四年間の年期奉公が決まり、多くの思い出を胸に、けなげに可愛い社会人として旅立った。

『昭和二十二年 新制中学一年生』(小田原市立第二中学校第三期同窓会・平成元年十月一日出版)から。著者、編集者代表の了解を得て転載させて頂きました。

(編集 植田博之)

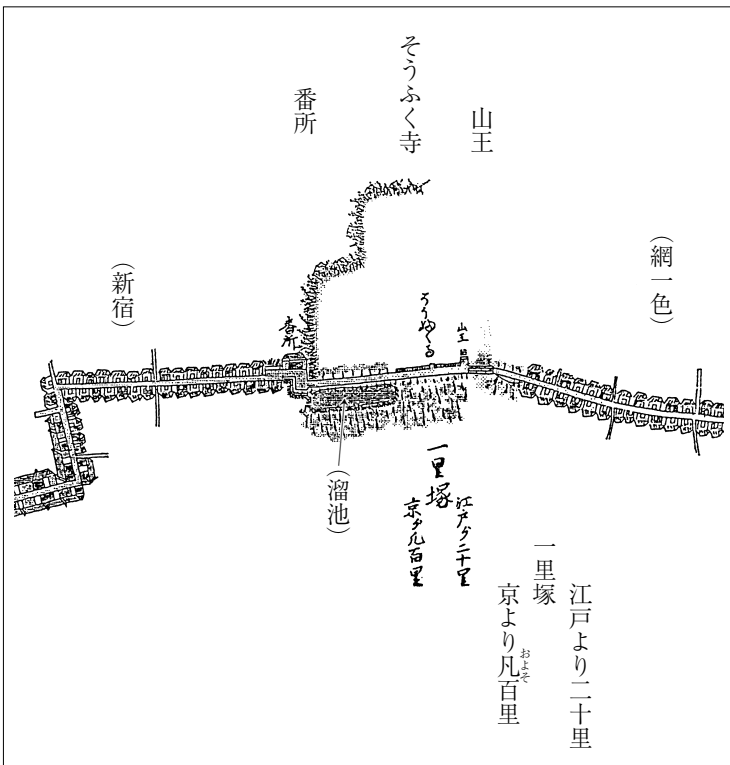
小田原の郷土史再発見

補遺「江戸口一里塚は、何処にあったか？」

石井啓文 ひろ ふみ

前号の拙考をお読みになった中村静夫先生(中村地図研究所)から、左に示す天和元々三年二六(一八三三)頃と言われる『東海道繪圖』をご教示いただいた。大変貴重な史料で、小田原では初公開の史料でもあり、掲載させて

いただきます。
この絵図も宗福寺の反対側、溜池(蓮池)の東側に、江戸より二十番目の江戸口一里塚があることを示唆していると思えます。



『東海道繪圖』(国立国会図書館蔵)より江戸口付近

一九八号(平成十六年七月号)

目次

語りついで平和を考える

鳥居泰一郎……………1
空襲、そして母は

山田利治……………2
小田原の郷土史再発見

補遺「江戸口一里塚は、何処にあったか？」石井啓文……………3
二度の命びろい

国産電機工場の爆撃と小田原
空襲 矢尾忠一朗……………4
小田原が暗転した日(上)

〜慶應四戊辰年五月二十一日〜
下曾我を訪れた文人たち 石井啓文……………7

古川一枝……………10
病い草(すみやか)になりて
日清戦争の病死者

青木良一……………12
信長塀 田中 豊……………14
とどけ、モンテンルパの空へ

捕虜収容所からの釈放を願つて
武田敏治……………15
向日葵 釵持芳枝……………17

ふるさとは遠きにありて(上)
待ちわびる引揚船 植田博之……………18
俺のシベリア俘虜記 青木英雄……………22

折にふれて 高田掬泉……………24
落穂集……………26
片岡日記③④ 片岡永左衛門……………27

小田原史談会回顧 三津木国輝……………28
会からのお知らせ……………30

寄稿

二度の命びろい

国産電機工場の爆撃と小田原空襲

矢尾 忠一郎

私の脳裏にやきついた終戦間際の生々しい記憶が昨日のことのように甦ってくる。

日本は支那事変(中国との戦争)に続いて昭和十六年十二月八日、ハワイ諸島の真珠湾に集結していたアメリカ太平洋艦隊に奇襲攻撃をかけ大東亞戦争(太平洋戦争)に突入していった。

国産電機工場の爆撃

小田原商業学校を卒業し、航空機の部品を製作していた国産電機小田原工場に入社したのは昭和十九年、十七歳の春だった。当時、この会社には町内から岩瀬自転車店の岩瀬斧五郎さん、露木洋服店の露木平太郎さん、井上呉服店の井上一郎さんも徴用で働いていた。

すでに、両親は他界し二歳年上の兄は徴兵にて北支戦線へ従軍し、我が家は姉と弟と三人で生活していた。

工場は現在の狩川橋を渡ったところ厚木道路の下をくぐり、富水方面に行く県道から酒匂川堤防に向っての広大な敷地の中

にあった。

その頃は、現在の県道も小田急線の蛍田駅もなく、あたりはほとんど水田地帯だった。農家がぼつんぼつんとある程度で、今日の蓮正寺と比べ、荒地もところどころに見つけられるものさびしいところだった。

その広い敷地の中の正門を入ってすぐ守衛室があり、五十米程先の左手に事務所棟、横の道路をへだてて第一工場、左横に第二工場、第三工場、倉庫と建ち並んでいた。寄宿舎は工場よりずーと離れた狩川添いに建っていた。

私は、第一工場で働く工具さんたちに工具を貸出す工具室に勤務していた。

年が明けて昭和二十年に入ると戦況は日本にとって益々不利な情勢になり、制空権を完全に握ったアメリカの大型爆撃機B29がサイパン島の基地より偵察飛行のため、時折り本土上空に飛来してきた。

コースは伊豆諸島上空を北上して富士山を目標に相模湾に入

り、小田原上空を通過していった。そして東京方面へ右折していくのを工場の脇に出て、戦慄をおぼえながら見つめていたのを思い出す。

三月になると、京浜地区の空襲が日毎に激しさを増し、小田原上空を機体に太陽の光線をあびながら、東京へ向って飛んでいくB29の編隊を怖々と毎日のように眺めていた。

八月十二日、旧盆前の暑い日だった。国産電機の工場が艦載機の襲撃を受けた。私たちはサイレンの合図で第一工場脇の防空壕にとび込んだ。

入ってまもなく腹に横からえぐられるような爆風の衝撃を受け、頭上から土がばさばさと降りかかってきた。

なんとも言えない恐怖感におののきながら腹ばいになり時間の過ぎるのを待っていた。

二十分程たった頃だろうか、あたりが静かになったので防空壕から這い出し表へ出た。

爆弾が落ちたことは分っていたが、あまりの近さに身が縮む思いがした。

防空壕から十数米先の事務所棟の左手前の空地に直径十米、深さ三米程の大きな穴があき、底には水がたまっていた。

防空壕が直撃されれば避難した私たちは全員即死だったにち

がない

第二工場前の事務所棟の横も爆撃を受け同じような大きな穴ができていた。

幸い二ヶ所の被爆した場所での死傷者はなかったが、寄宿舎に落ちた爆弾では数名の方が犠牲になったと聞く。

翌日、被害に遭った寄宿舎を見にいったところ、十数米手前に不発弾がころがっていた。直径一米弱、長さ一・五米程の大きな弾だった。寄宿舎は破壊されてない場所もあったが、洗面所あたりは無残な状況だった。

小田原空襲

八月十四日午後十一時を廻った頃、空襲警報のサイレンが危急が迫ってきたように鳴り響いた。

私たちが姉弟はすぐにとび起き、服に着がえ防空頭巾を被って表に出た。静まりかえっていた通りも人のざわめきで緊張感が漂ってきた。各店の前に備えられた防災水槽の端に腰をかかけ、今晩も無事であって欲しいと祈るような気持で空を見上げていた。

平塚は七月に空襲され、焼野原になってしまったらしい。次は小田原だと巷の噂が的申しなければよいが、そんなことを弟と話し合っていた。

十二時を過ぎた頃だったか、

B29 独得の「ウオーン、ウオーン」と唸る無気味な爆音が北の上空からきこえてきた。

目を凝らして見上げてみると、ばあーと上空が明るくなり、B29の大きな機体が目に映り、赤い物が落ちてくるのが見えた。照明弾のあとに落下してくる焼夷弾(油脂焼夷弾)だった。

家の裏に廻ると庭に油のしみこんだ布が、火を吹きながらちよろちよろと燃えている。急いで濡れたこもを被せ上からたいた。

油がしみこんでいたので、なかなかしぶとく消すに容易でなかった。

すると隣りの小沢さん(現社会保険事務所の処)のおばあさんの「助けて、助けて」と叫ぶ声がした。

弟と一緒に駆けつけると、台所の天井板にめらめらと火がひろがっていくところだった。

二人ですぐ近くの井戸からバケツで水を汲み出し、十杯ほど掛けて消すことができた。

いったん家に戻り、庭の消火は完全か確認し、表の道路に出て見渡すと、一丁田から青物町にかけていたる所から火災が発生していた。

現在井上呉服店とその奥の林さんの場所は空地だったので被害の心配はなかったが、その南

側の関口さん(現石岡)の家と裏にある二軒長屋が気になってきた。

その先にはお稲荷さんを祀る町内会館がある。二軒長屋からは火があがっていなかったが周りがいやに明るく、もしやと不安がよぎり急いで空地の方から家へ入っていった。

すると、家族は避難したあとらしく玄関はあけっぱなしで人のいる気配はない。

もうすでに火は天井あたりまで燃えあがろうとしていた。

水を求めて細い露地を通り、表へ出た。関口さん(関口衣料店)の水槽には水が少なく、向いの湯川さん(油統商店)の水槽から水を汲みあげ急いで長屋の玄関までいったが、もう手のつけられる状態ではなかった。

そこはあきらめ、まだ火が移っていない関口さんの家を救おうと、近所の人たちと家のまわりの壁へバケツの水を夢中で掛けた。

湯川さんの水槽は一般のものよりはるかに大きく、上に水道の蛇口があり、水の補給では助かったが、水槽から水を運び壁へ掛けるのは大変だった。熱風を吸い込みながら、二、三十回に及んだ。

しかもあたりは火が燃え盛っている。

熱いこと熱いこと、体中が火傷で包みこまれていくように感じた。

周りから「頭から早く水をかぶれ」と声がかかり、一瞬ためらったが思い切つて、バケツの水をかぶった。

隣組の人たちの水掛け奮闘で、関口さんの家は類焼を免れた。

長屋の火は、細い通路をはさんだ通称「かざりやの叔母さん」(小林)とよんでいた家に燃えうつり、市川さん(竹亀銘木店)、その隣りの水越さん(水越印刷)も危くなってきた。

ここまで燃えひろがってきては、もはやバケツリレーの水掛けでは手に負えない。火の粉が渦を巻いていた。

しばらく焼夷弾の落ちなかった向い側で、どうにもならぬ火の勢いを眺め呆然としていた。

火は道路の裏手の家屋の密集した方から、南側の家々へ移っていった。

現在の長谷川さん(長谷川建材社)の敷地は、空地だったので火は進まず、岩崎さん(岩崎種子店)山口さん(あまや呉服店)は無事だった。

裏手からの火勢もだんだん道路側に広がっていった。勝又さん(勝又運送店)の店の梁が、真赤に炎にくるまれ、道路の方へ

ばさつと崩れ落ちる瞬間を見た時、何とも言いようのない思いがこみあげてきた。情けないやら悔しいやらで、目頭がじーんとしてきた。

隣りの近山さん(近山刃物店)、岩瀬さん(岩瀬自転車店)その奥の数軒の家々も相次いで燃え落ちていった。どのくらい経つたのだろうか、燃え盛っていた炎も下火になり、真黒に焼けただけれた跡から時折り燃えかすが火を吹く程度に収ってきた。

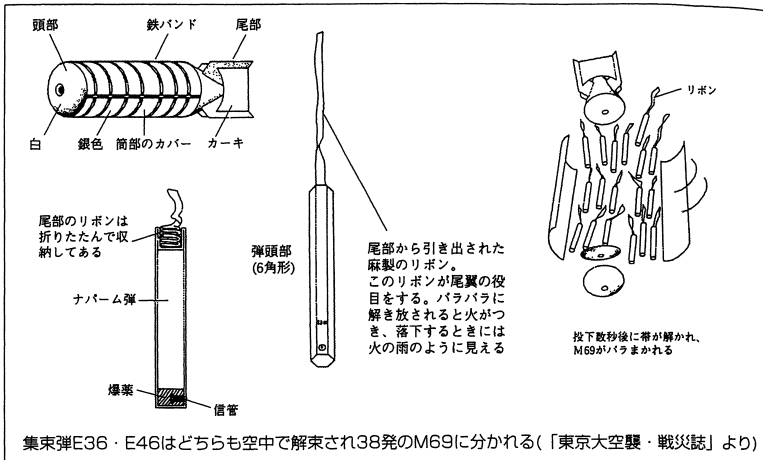
夜が白々と明け、東の空がうす明るくなってやつと周囲は静かになった。家へ戻りひと休みしようと思いつつ上ってびっくりした。

私が寝ていた布団の枕元から僅か二十糎位離れた畳の上に、天井をつき抜け、直径六糎、長さ六十糎程の六角形の物体が横たわっていた。

恐る恐る濡れ手拭でつかみ外へ出てしげしげ見ると、油の染みた布が入った焼夷弾だった。急いで水槽の中へほおり込んだ。

もしあの時、空襲警報のサイレンが鳴っても起きずに布団の中に入っていたとしたら、その直撃を受けていたかもしれぬ。

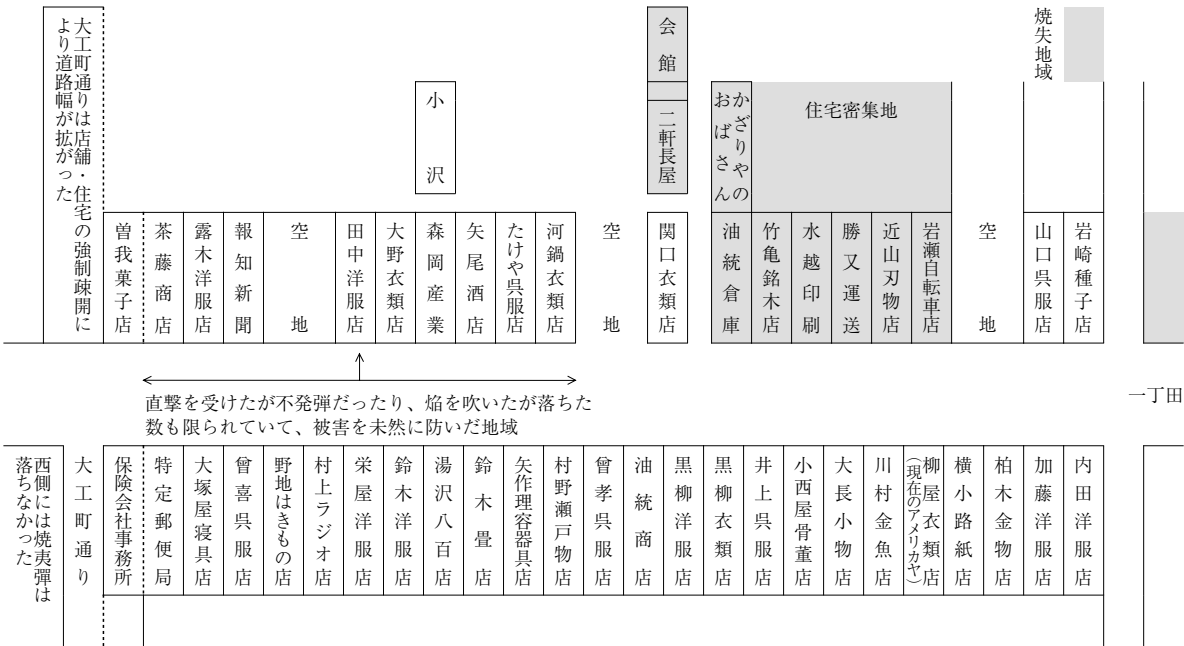
ぞーとして身の毛がよだつ思いがした。



正午に天皇の玉音放送を村上ラジオ店(電友會)で聴いた。雑音が混じり聴きとりにくかったが、日本が戦争に敗れたことを知った。

中国大陸で終戦を迎えた兄は、日本へ復員の途中病に倒れ、年が明け一月十八日無言の歸還となってしまった。届いた白木の箱にはわずかな毛髪が入っているだけだった。

終戦前後の台宿通り



矢尾忠一郎さんは、昭和二年三月生れ、元台宿自治会長、矢尾酒店の経営を長く続けてこられました。

同世代の方々は、夢多き青春時代を尽忠報国の教育のもと、日本の激動期を生き抜き、戦後の復興の一翼を担った気骨ある人たちがばかりです。

国産電機工場の爆撃は、『小田原市史別編年表』に「昭和二十年八月十二日、豊川村飯泉に爆弾投下」と記録されており、筆者が遭遇した日の艦載機による襲撃がそれに該当するのではないのでしょうか。

八月十五日未明の小田原空襲は、アメリカ空軍がこの日降伏に踏み切った日本に対する最後の作戦になることを承知のうえでおこなったとすれば、人道上からも許されるべきものではありません。

当時、新玉国民学校五年生だった私も、火を吹く二発の焼夷弾を消したことは覚えておりますが、罹災現場の一部始終を語る人は、ごくわずかになってしまいました。

貴重な体験を後世に伝えるべく、今回の戦時特集に寄稿していただきました。

武田敏治

小田原が暗転した日(上)

〜慶応四戊辰年五月二十一日〜

石井啓文ひろふみ

はじめに

「日本の一番長い日」という題名の映画があった。「小田原の一番長い日」とも言える日が、戊辰年五月二十一日である。

『戊辰箱根戦争始末』の著者高田掬泉氏は、その「あとがき」で、次のように記している。

「現代の小田原人は箱根戦争の史実をほとんど知らされていない。それは維新時における小田原大久保藩の狼狽と首鼠定まらぬ醜状を恥じて児孫に多くを語らなかつたからであろう。大久保藩が時代の転換に際して確たる方針を持てなかつたことは決して恥ずべきことではない。

唯、天皇制国家建設の明治期にあつては、たとえ、一日たりとも官軍に抵抗した一事を以て公然と口に出すことを憚つたのである。 (中略) 明治大正期における小田原の姿が精彩を欠き、仮眠状態で過ごした半世紀であるのは、単に古臭い城下町というだけでなく、維新時における挫折、いわゆるバスに乗り遅れたことが、その後の進路を

灰色化したのではないかと考えられる。(後略) 平成三年八月

確かに、箱根戊辰戦争を知らせる書物は少ない。高田氏も参考にされた『明治小田原町誌』(片岡永左衛門著・『町誌』と略す) くらいである。ただ、史料を探れば『近世小田原市稿本』『明治戊辰小田原藩情概略』『関美章六十夢路』(『六十夢路』と略す) など、ない訳ではない。これらを基にした『小田原市史料編近世I・Ⅲ』で概要は掴める。

一、小田原市史に見る経緯

小田原藩が勤皇から佐幕へ、そして勤皇へと再逆転する発端は、慶応四戊辰年二六〇閏四月十一日、上総国請西藩主林昌之助忠崇率いる遊撃隊二百余名が、二艘の船に分乗し真鶴に上陸したことからは始まる。

同日夜、林昌之助は吉田柳介ら四人の家臣と小田原来城。城代家老杉浦平太夫屋敷で、渡辺了叟・蜂屋十大夫・榎島主令・竹内藤左衛門らと会談、佐幕論を説き挙兵を打診した。このとき小田原藩は、二ヶ月

前の二月二十七日、既に征討軍へ勤皇の誓詞を提出していることもあり、同意できない旨を告げて丁重に断る。

この後、遊撃隊は幕府代官江川太郎左衛門英武に会うべく隊を葦山に進めるが、江川は京都警備で留守であった。やむなく、沼津藩に向うが、藩主水野出羽守忠敬も甲府城代赴任中で不在のため、十六日には駿東郡御殿場村に到着。

そして十九日に、徳川家鎮撫の正使大目付山岡鉄太郎(鉄舟)らと会談。しばらく甲斐国八代郡黒駒村(山梨県御坂町)で待機した後、五月になり同隊は沼津藩預りと決まり五日、香貫村(沼津市)・霊山寺を宿にする。

一方、こうした遊撃隊等佐幕派脱藩士の動きを察知していた大総督府は、翌六日、伊豆・相模軍監として中井範五郎正勝(鳥取藩)と三雲為一郎種方(佐土原藩)を小田原に派遣する。

五月十五日、新政府軍は上野に籠もる彰義隊を包囲し一日で壊滅させる。この情報が、遊撃隊、小田原藩、そして二人の軍監にどのように伝えられたか？

確実な史実は判明しないが、四日後の十九日払暁、遊撃隊人見勝太郎率いる先鋒隊は、香貫村を脱出し箱根に向う。この報が小田原の中井・三雲両軍監に

届き、箱根関所の防備強化の指示が小田原藩に下される。以下、日を追って『小田原市史』の記述を記す。

二十日、遊撃隊の人見勝太郎率いる先鋒隊は箱根関所に到着し、暫く両軍が睨み合った後、夕方から戦端が開かれた。兵力に差のある先鋒隊は、箱根宿を半分焼いて退却した。その頃、小田原城では遊撃隊と戦うべきかの議論が起こっていた。そして、遊撃隊に加わっていた小田原脱藩士加藤音弥の情報(誤報)で、勤皇から佐幕へと逆転してしまう。

二十一日暁天、用人関小左衛門は家老渡辺了叟の命により、馬を馳せて箱根に上り隊長吉野大炊介と早川矢柄に休戦の藩命を伝え、人見勝太郎らと和睦する。すると先鋒隊は、元箱根の官軍隊士の宿舎を急襲し十一人を殺害。更に箱根に向かつて来た中井軍監一行と芦ノ湖畔権現坂で遭遇、範五郎を殺害。午後四時頃、一部藩士が藩論に背くことを承知で小田原宿の三雲軍監に急を告げた。三雲は東海道を山王見附を出たが、酒匂川が増水で川留のため、網一色から漁船を雇い、下役二人と共に藤沢から江戸に向った。

二十二日、箱根でからも難を逃れた官軍吉井頭三らは、上方(板橋)見附で小田原藩士山田龍兵衛・小泉健蔵に斬られ従僕は捕縛される。遊撃隊を代表して人見勝太郎と伊庭八郎は、小田原城に入り家老渡辺了叟らに会い、小田原藩拳兵の準備を話し合う。

二十三日朝、沼津から来る筈の遊撃隊本隊の加勢に、小田原藩でも一小隊を派遣する。そうした中、江戸から小田原藩監察職中垣齋宮(謙齋)が小田原に到着し、藩論を勤皇に戻すべく重役に説得を始めた。

江戸では、小田原藩の勤皇が評価され、大総督府から五万石加増と伊豆・相模両国取締が内定していた。この報は、江戸藩邸で使者を遣わした馬入川の川留で届いていなかった。また、藩主の決定とはいえ国元の佐幕は独断専行であり、江戸の首脳陣は全く関知しておらず、中垣を使者に立て国元の説得に当たらせただのである。そして、忠礼は藩論を勤皇に戻した。

二十四日、遊撃隊に藩論を通告、領外退去を求める。午後、小田原を出た同隊は湯本福住九蔵方等に移る。藩を代表して、大磯の問罪使のもとに年寄蜂屋重太夫らが赴く。

二十五日、二十三日付官軍詰問状が小田原に届く。藩主忠礼は、小田原城を出て大工町本源寺で謹慎。大磯で休憩の問罪使に家老岩瀬大江進・吉野大炊介が赴く。遊撃隊は、三枚橋・湯本茶屋・畑宿・箱根新谷等に分散止宿。

二十六日未の刻(午後二時)頃、遊撃隊と小田原藩兵が入生田村山崎で戦闘(箱根山崎の戦い)。

二十七日から二十九日まで、小田原藩兵は、箱根全山で遊撃隊残兵を掃討。

二十八日、林昌之助ら遊撃隊残党は、熱海より船で逃走する。

六月六日、家老渡辺了叟・吉野大炊介・年寄早川矢柄・御用人関小左衛門の四名、江戸へ護送される。

六月十日、藩主宥免を願う遺書を残して、家老岩瀬大江進が割腹する。

以上が、『小田原市史』に見る箱根戦争前後の概略である。小田原藩の悲劇を最低限に防いだ中垣謙齋は、この明治元年十二月二十八日、禄二百石を増され三百石となり、現在、大久保神社には顕彰碑も建立されている。冒頭に記した『戊辰箱根戦争始末』は、この中垣謙齋を主人公にした小説である。

二、彰義隊上野戦争の情報

前記箱根戦争に至る経緯で、何故、小田原藩は勤皇から佐幕へ、そして勤皇に戻ったのか？

これまで、勤皇・佐幕論争が言われているが、それだけであろうか？ 特に、上野戦争(五月十五日、彰義隊×官軍)の情報、どのように伝えられたか？ 家老渡辺了叟と共に佐幕派の急先鋒と言われた関小左衛門美章が残した『六十夢路』がある。彼は『戊辰困難記』と題して、自分の行動を記している。

五月十七日夜、三島の宿役人世古六太夫より「去十五日江戸上野の開戦ありと密告す」とある。おそらく「彰義隊が決起した」との報であろう。翌十八日「小田原の軍監中井・三雲両氏から、上野開戦を以て沼津出兵を止め、箱根関所を警備せしむ」とあるから、この報は、軍監及び小田原藩にも伝わっていたのであろう。ただ、その内容が、官軍が上野を包囲しての攻撃(「彰義隊の決起」ではない)と、一日で壊滅したことは伝わっていないのではないか？

そして、十九日晴天、「遊撃隊若干人に沼津軍監和田氏の旅舎が襲われ、余は急報せんとして三島宿に至る。喜瀬川暴漲す、遊撃隊長人見勝太郎先鋒として香貫を脱す。余は営に入り人見

氏に会す」と記し、「加藤氏も亦いう。乙弥という、脱して同隊中にあり。此夜復命す」と記している。

この加藤氏について、『町誌』は「当藩の脱走加藤音弥、渡辺源四郎は榎本釜次郎の授命に帰藩し、拳兵の遊説に際し雲井龍雄等も来り奥羽諸侯の聯衡を声明し、偶々可遊撃隊の躍動に遇ひ志を動かし、遂に反旗を翻すに至れり」。また「当御家中加藤市太夫総領二身持不埒ニテ先年勘当ニ相成其後浦賀同心ニ縁付キ候得共同所ヲ離縁ニ相成當時浪人ニテ遊撃隊に相成居候加藤音弥ト申者罷越し兩三日之内徳川家軍勢多人数小田原表江押寄せ参候趣」と記している。

『町誌』は「加藤・渡辺・雲井らが小田原城に来た」ように記している。一方、関は「自分が人見と加藤に会い、その夜復命した」とある。関は小田原城に帰り、人見と加藤の言い分を藩に報告したということであろう。どちらが正しいのか？ 身持不埒で脱藩者の加藤らが簡単に小田原城に入り佐幕論を説いたとは考え難い。

この後、関は「二十日、林氏以下を討たせんとして、余を箱根関門の兵を督さしむが、病に託して家に臥す」とも記している。関は会議には参加せず報告

のみで、家に戻ると遊撃隊と戦うよう指示されるが、病(仮病)を口実に命令に従わなかったということだろう。

二十一日「小田原に於て和戦の藩論一決し、払暁、余特命を奉じ箱根に至る。(中略)横井氏と出府、藤沢駅で三雲氏と邂逅、刺んとして果さず」とある。関は藩論が佐幕に決まると、箱根関所に向かい遊撃隊の人見らと和議を結び、共に小田原に下ったのである。午後には江戸藩邸への使者となり、藤沢で軍監三雲と邂逅している。

翌二十二日午前、「芝本邸に入る。中垣氏より上野彰義隊敗潰を知る」とある。関は、七日も前の彰義隊敗走に愕然としたであろう。その無念さは想像に余りある。一方、佐幕を聞いた中垣も驚いたに違いない。「或は恐怖畏縮し異議紛々たり」と江戸詰藩士の様子を記している。

そして、関は「教学院なる君家の廟前に偶刺せんと」と記し、二十三日は「牛込大久保彦左衛門氏。本町大久保主膳正氏を尋ね応援を乞う」。二十四日「問罪使、小田原発向」。二十六日「官軍、藩邸を鎖固す。余、教学院に行くが横井氏は中垣氏の説を信じ小田原に帰る。余、憤然として同院を去り、山岡氏(鉄舟)に会う。姓名を変更し奔走し

て時機を待つ」。大久保家親戚を訊ね、失意の内に再度教学院(大久保家菩提寺)に向っている。死をも考えたのであるうか。

二十九日、「水沢主水と開陽丸に往き榎本氏に謁す」。

六月一日、「小田原の動静を探らんとして、変装して潜に山駕籠を雇う」。同日「大磯問屋某の家に憩い、夜、井細田村星野氏に投じ浅田叔父に会す」。開陽丸に榎本武揚を尋ねるが、結局、変装して小田原に帰り、登城したのであろう。

六日「江戸に送られる」。やがて十月十日暁、後継の藩主忠良に命じられ家老渡辺了叟は江戸上屋敷で切腹。吉野・早川・関は、十五日江戸発途、翌十六日帰藩。国元で謹慎、解かれるのは明治三年二月になる。

これまで、尊皇・佐幕論が強調され、中垣謙斎の事績が多く語られている。しかし、私は彰義隊上野戦争の情報が大きく左右したように思う。閏四月に林昌之助自らの佐幕論に応じたかった小田原藩が、急遽、勤皇から佐幕に転じたのは「彰義隊が決起した」と判断したからであろう。

その後の中垣謙斎の説諭も、彰義隊壊滅を知らされたからこそ、再逆転したのだと考える。関は、江戸に着いて始めて彰

義隊壊滅を知らされ、それを納得するまで大久保家親戚や山岡・榎本をも尋ねている。関小左衛門の「無念さ」が偲ばれる。その後、変装して小田原に帰り、縛に付いたことは流石と思う。

なお、遊撃隊には十七日に彰義隊壊滅の報が届いていたという史料も見え、先鋒隊は、人見勝太郎らの「抜け駆け」とも言われ、彼らが小田原藩と和陸後も、林昌之助率いる本隊は山城に本営を置き、箱根関所を警護していたが、そこを動いた史料は見られない。

三、福住正兄の奔走

小田原藩が尊皇に再逆転し、遊撃隊に藩論を通告、同隊に領外退去を求めたとき、彼らは素直に小田原を退き、湯本福住九蔵方等に移っている。宿を提供した福住正兄の対応を「報徳博物館友の会だよりNo.67」から、概略を引用させていただく。

「当時、箱根一四ヶ村の取締役であった福住正兄は、村々の代表として村人らを戦火から守るために奔走します。

箱根が遊撃隊の駐屯地になると、正兄は略奪を免れるために遊撃隊の物資運搬などに協力します。しかし、新政府軍に従うことを明らかにした小田原藩兵が山崎へ進軍を開始すると、正

兄は戦火が及ばぬように防備を固めると、同藩の領民としてこれ以上は遊撃隊に協力できないことを意を尽くして説明し、同隊の了解を取り付けました。

遊撃隊の敗走後、正兄は新政府軍側の厳しい尋問を再三受けますが、理路整然と応答し、遊撃隊への協力に関して責めを負うことはありませんでした。明治十三年六月、湯本村の人たちと福住正兄により、早雲寺に「遊撃隊供養碑」が建立されました。撰文は人見寧(勝太郎)で同寺に葬られた隊士九人の十三回忌に建立された」という。

板橋地蔵尊にも中井軍監らの墓がある。こうしたことは、尊皇・佐幕のどちらも敵でも味方でもなく、お互いに日本の将来を考えての行動であったことを、地元民も充分に承知していたのであろう。そして、幕府に攘夷を迫った薩摩・長州を中心とした官軍も、新政府になると自らも攘夷は果たさなかった。外国と戦うだけの国力がなかったからと言われている。こうした国力云々の攘夷思想が、潜在的に日清・日露から太平洋戦争にまで繋がったのでは? と考える。次回は、「暗転した小田原」と、箱根戊辰戦争の墓碑を訊ね、平和について考えたいと思う。

寄稿

下曾我を訪れた文人たち

古川 一枝

昭和十九年八月、小学校六年生の私は弟と二人で下曾我へ疎開してきた。第二次世界大戦の戦況が悪化して、都市の学童疎開が一斉に行われたためである。下曾我は父、尾崎一雄の故郷で、祖母が一人で暮らしていた。それまで毎年夏休みに東京から泊まりに来ていた私にとつて、下曾我は楽しい避暑地だった。しかしその夏は、学校も何もかも変るこれからの生活を思つて、子供なりに意を新たにしていたのだ。

間もなく、母や幼い妹と東京に残るつもりでいた父が胃潰瘍で仆れた。父が絶対安静の状態を凌いだのち、長い東京の生活を切り上げて下曾我へ帰って来たのは同じ年の秋だった。そして、あと三年の命と医師に言われると「生存五ヶ年計画」を立てた。四十四歳の時だった。混沌としたしかも物資不足のあの時代、父は終戦をはさんでまる六年を闘病と最小限の執筆に当たった。「虫のいろいろ」「美しい墓地からの眺め」等々の作品はみな病床で書かれたものであ

る。

父が外出できなかったのも、友人や出版関係の人たちにははるばる下曾我まで足を運んでくださった。そのおかげで、私は多くの文人にお目にかかることが出来たのである。

最も足繁く訪ねてくださったのは、戦前から家族ぐるみのお付き合いがあった「人生劇場」の作者、尾崎士郎さんで、当時は伊東に疎開しておられた。士郎さんは戦時中は戦闘帽に国民服、ゲートルを巻き、リュックサックを背負つたいでたちで、警報のため汽車が停まってしまい、国府津から歩いて見えたこともあった。

昭和二十三、四年のある日、書家の内山雨海さんも一緒に書家から降り出した雨が庭の秋海棠の群落に降り注いだ。ざわめく秋海棠を素早く色紙に墨で描き、花に紅をさした雨海さんの絵に、

下曾我は雨となりけり断腸花
と士郎さんが賛を添えた。秋海棠でなく断腸花できまるのが

士郎さんらしい。

古木悠然と大鷲の羽づくろひ

父も一句したためて、当時公職追放令を受けていた士郎さんを慰めたのだ。

磊落な笑顔の中の優しさ、訥々とした口調の温もり、士郎さんの気取らない男らしさは多くの人を魅きつけたのである。

雨海さんは尾崎家の墓碑のために揮毫してくださった後、年上の父より先に亡くなった。

太田治子さんの母上太田静子さんは、東京から疎開して城前寺の筋向いにある雄山荘に住んでいた。私の母とは、戦中に曾我山に砲台を築く勤労奉仕で、共に半人前同志ということを知り合いになっていた。

私が中学二年の昭和二十二年二月、太宰治は雄山荘に静子さんを訪ねて数日滞在し「斜陽」を執筆、二十四日に静子さんの案内でわが家を来訪された。夕暮どきで、その頃多かつた停電の最中であつた。母が用意したお茶を持って私がソロリと父の部屋に入ると、いきなり父の大きな声が出た。

「そりゃあ君、井伏が怒るのは当り前ですよ」

机の上のローソクの炎が揺れて、幾分眉を吊り上げた峻しい父の顔を照らし出した。父と向

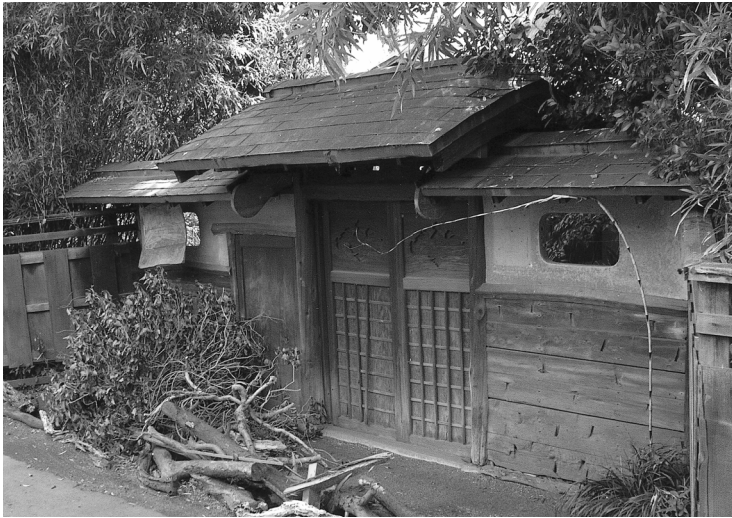
かい合った太宰さんは逆光になってその表情は見えなかったが、沈黙のなかで俯いた太宰さんの大きな鼻のシルエツトと睫毛の瞬いたのが私の目に焼きついたのだ。

あくる日、父は楽しそうに隣室の母に話しかけた。

「ねエ君、太宰君がね、『尾崎さん、これはまるで『鉢の木』です』と云ったよ。うまいことを言うもんだ」ほんとうです「ね」

何とも言えない和やかな空気であつた。太宰さんは配給のお酒をひとりで飲みながら、病氣療養中の父の髭面や、長押し掛けてある槍や床の間の鏡櫃などを見廻して、「鉢の木」の話を連想されたのに違いなかった。来訪の翌日、太宰さんは伊豆に発つて旅館に籠もり「斜陽」を書き続けた。

太田静子さんをモデルにしたと言われている「斜陽」の舞台は伊豆になっているが、実際は下曾我の雄山荘と思われる。翌二十三年六月、太宰さんが亡くなり、静子さんが私の家へ見えたり、私が両親の使いで雄山荘へ行くことも度々あつた。当時の雄山荘は「斜陽」の文中にあるように、「支那ふうのちよつとこつた山荘」で、瀟洒な門を入ると篠竹が美しく、引戸の玄関



現在の雄山荘 (平成16年3月写)

の右手に石灯籠と羊の石像、左側には中国の儒学者風の像が立っていた。ヒロインかず子の言う支那間らしい欄干のある部屋は玄関のタタキに立つとよく見えた。「二月には梅が咲き、この部落全体が梅の花で埋まるのも下曾我の風景そのままである。「斜陽」から半世紀を経た現在も、二月の曾我の風景は余り変らない。

ものその荒廢のさまに胸が痛んだ。くぐり戸の前に古びた札が下っていて、「大雄山荘譲渡のお知らせ このたび諸事情により大雄山荘を譲渡する事になりました。ご希望の方は(以下略)所有者」と読めた。この時はじめて「雄山荘」は通称らしいことが判った。塀の黄色い漆喰の窓から覗くと儒学者の石像は無くなっていった。

治子さんにこの山荘での記憶があるだろうか、ふと私は思った。彼女は四歳になるかならずで逗子へ引越したからである。太宰さんが亡くなって一ヶ月半を経た二十三年八月一日に、井伏鱒二、伊馬春部、今官一の諸氏がわが家を訪れた。太宰さんの相談相手のような立場にあった井伏さんが、津島家(太宰治の本名は津島修造)の意向を太田静子さんに伝える役目を担って雄山荘に赴いた帰途だった。伊馬さんは太宰さんの友人で、当時ラジオの放送作家とし

て活躍していた人である。太宰さんが「斜陽」執筆のために借りていた静子さんの日記を返却するように、伊馬さん宛の遺書で頼まれていたのだった。その日、ブランドーを持参した井伏さんは一人残って、久しぶりの父のおしゃべりが楽しそうだった。駅前の富士屋旅館の「婆さんとの約束の刻限」を何度も気にしながら、「もう、あかんワ」と腰を上げたのは十一時を廻っていた。母と私が富士屋旅館までお供をしたが、ゆるらと歩く井伏さんのや、甲高い声が深夜の坂道に響き渡った。翌日、東京へ帰られる井伏さんを、ステッキをついた父は下曾我駅で見送った。母が付き添った。

わが家を訪れた文人では、もう一人、林芙美子さんがさかや旅館に宿泊している。昭和二十四年五月、高校二年の私が学校から帰ると、小柄でふっくらした中年の女性が父の枕元に座っていた。その頃にしては上等な洪いローズ色の服の人が誰か私にはすぐ判った。父の顔を覗き込むようにちよつと横座りになると、衿なしのワンピースの縫い目がゆがんで少し窮屈そうだった。私たちが東京の下落合にいた頃、近所に住んでいた林さんは当時二、三歳の私を大変可愛がった。父に言わせると尋常の可愛がり方ではなかったそうだが、私には記憶がない。「一枝ちゃん、小さい時の面影そのまんまね」

花のいのちはみじかくて
苦しきことのみ多かりき

「小さい人もいるんだし、無理しないで長生きしてくださいよ」

姉のような口調で父を励ますと、予約しておいたさかや旅館へ泊まりに行った。あくる日、林さんをお見送りしようとして宿へ行くと、林さんはさかや旅館を大変気に入って、

「うちのおばあちゃんを連れて又泊まりに来たい」

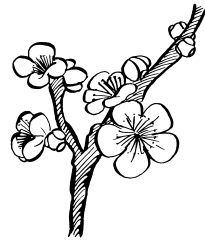
と言った。しかし二年後の二十六年六月二十九日、林さんは過労がもとで急逝した。

今年の春、さかや旅館のたたくまいを想い出しながら下曾我駅前の通りを歩いた。宗我神社のそばにある私の実家と下曾我駅の間はいつも近道をしてしまいうので、この通りは久しぶりだった。ところがさかや旅館は無かった。今は珍しい板塀も、二階の長い欄干も勿論見ることに

は出来なかった。跡には今風の家が建っていた。お向かいの風月堂でいろいろ教えていただいた。さかや旅館は昭和の終りと共に廃業したのだった。小粋な女将さんのことは聞きそびれた。風月堂のご主人は、先代と瓜ふたつと言うほどではないのに、私は思わず先代の姿を重ねてしまった。面倒見のよいところ、一本気なところ、先代と同じものがあるのだろう。

昭和三十年頃、先代が創作し、私の父が命名を頼まれた和菓子がある。おみやげに戴いたそのお菓子は、梅の里ならではの懐かしい味がした。

二〇〇四年五月記



病い革(すみやか)になりて

—日清戦争の病死者—

青木良一

一、日清戦争の呼び名を、かつては「明治二十七八年の役」と言っていたと気づいたのは、西さがみ近辺の戦争碑を巡っているときだった。南足柄の最乗寺や松田の寒田神社境内に大きな記念碑があり、いずれにも「明治二十七八年之役陣亡軍人」とある。明治二十七年(二六〇四)は今から百年余り前のことだが、呼び名一つにも旧型の車を見たような時間の隔たりを感じた。

日清戦争の従軍者を碑に見るのは少ない。右の二つの碑の他

には寿町の本光寺及び五百羅漢のある玉宝寺の境内にある。したがって、亡くなった人の慰霊碑を見かけるのも稀である。早川海蔵寺の山門跡の脇には、その一人、相田代吉さんの碑がある。関東大震災で折れて大きな補修をしている。碑の表は「殉國陸軍歩兵二等軍曹 相田代吉君碑」、裏には「台湾列島・澎湖島・於馬公城没、明治〇〇八年八月一日建之」とある。

幾つで亡くなったのか。代吉さんには、「明治十五年(一八八二)徴兵合格、明治二十二年(一八九九)

古川一枝さんは、昭和12年(一九三七)『暢気眼鏡』で第五回芥川賞を、昭和53年(一九七八)文化勲章を受賞された尾崎一雄(一九〇九〜一九三三)のご長女である。

昭和19年、東京から父君の故郷である下曽我に疎開、小田原城内高校を経て早稲田大学英文科を卒業された。

平成13年4月には、尾崎士郎氏のご長女中村一枝さんと、熊本日新聞夕刊に『ふたりの一

川村外四ヶ村組合収入役』という記録が残る(『神奈川県第六区人物誌』)。当時は満十七歳から兵役義務があった。

また、妻への便りの中には「明治十八年四月よりまる三年、おまへにくろうをかけ」という文面もある。現役は満二十歳以上の者が対象であったから、徴兵検査から三年後に現役召集されたことになる。

明治十五年に満十七歳であれば、遡って生年は慶応元年(一八六五)であろうか。弟の磯吉さんは、慶応三年(一八六七)生まれ(『神奈川県史』人物編)である。これは、「代吉さんと磯吉さんは二つか三つのちがい」という相田家に伝わる話と一致する。享年三十三歳と推定される。

明治二十七年(一八九九)九月一日、

「枝」と題したりレーエッセイを一年に亘って連載された。『ふたりの一枝』はさらに書下ろしの作品を加え、15年秋に講談社より単行本として出版されている。

ちなみに尾崎家は下曽我とは深いかかわりがあり、一雄氏の祖父の代まで代々宗我神社の神官を務めておられた。

(早川初枝)

第一師団後備歩兵第一連隊第八中隊に入隊した。弟の磯吉さん宛ての葉書には、「石橋町ノ脇山氏及びその後片浦筋ノ者多ク在隊いたし候」とある。なお、脇山傳吉さんも、本光寺境内の「征清役戦死殉難忠魂供養塔」には、「病死者」に列なっている。

二、相田代吉さんの書簡は、凡そ百年の間、早川相田家の柳行李にあったものを、酒匂の瀬戸長治先生が整理・解説されて、一九九八年(平成十)から『小田原史談』(第一七五号〜一八二号)に連載された(『明治の書簡でつづる相田軍曹と日清戦争―無残、澎湖島の戦い』)。

二〇〇〇年(平成十二)には、右に掲載できなかった弟磯吉さんの書簡を中心に、『相田軍曹と早

川村の人々―阿兄へ、妻へ・夫へ(瀬戸長治編)としてまとめられた。

右のなかで、弟から兄への手紙は二十二通残されていた。次のような記述もある。

「兼ねて御申し越しニ相成り候桑苗植え付けノ義は、少々時季も早カルべくト存ゼラレ候ニ付、只今ノところ、自今植付ノヶ所穴掘りニ着手スル手配ニこれあり候。清酒火持ノ義ハ、御承知の七号桶ノ分は大丈夫ノ様ニは候へ共、先般来、二番火入れ致し置き候。目下ノトコロ、先ツ清酒□□□、石数三十五、六石はこれあるべく候。本年仕込みハ御話しノ通り七石掛ケ十、先ツ一寸届高百五十石位はこれあり候。払いニ付テハ、例年阿兄ノ御助力ニテ、金融も都合よろしく候ところ、本年は誠に彼是困難ニ遭遇致し居り候。併し乍ら、何レニ致サセ前書十本は仕込スル心得ニ御座候間、御安心下されたく候。」(明治二十七年十月九日付)

「蜜柑第三会は十一月六日、雲州四本・本蜜柑四本・神田連雀町美の忠へ差し送り申候。先ツ四回マデ、合三十本出荷仕り候。右は、何レモ今に仕切り参ラス候間、是は取急キ乱草御海容下されたく候。老母義も案外壮健ニ候間、御安心下されたく候。」

義・斧二両氏も、毎日学校勉強致居り候。小子子供も皆々壮健ナリ。親戚一同も異変これなく候間、是又御放念下されたく候。時節柄、身体ノ御撰養專一ニ存候。」(十一月十一日付)

当時の兵役は、現役三年・予備役四年四ヶ月で、その後の後備役(五年)であるから、後備兵の多くは三十歳を越える。

応召により一族の中核が抜けたあとは大きい。残された家族のこと、生活を支える桑苗・清酒・蜜柑のこと、また、応召で中断した組合役場の事務・村内の大事件など、弟が兄に相談したこと、聞かせたいことは尽きない。

相田代吉さんの最期を記した次の書簡がある。中隊長から遺族に宛てたものである。

「相田代吉君儀、去月(明治二十八年三月)わが軍澎湖島ヲ占領候際、兩日ノ戦いニ勇進奮闘その功少なからず候ところ、戦後悪疫流行シ、不幸ニモ病魔の侵スところトナリ、同月三十一日病死いたされ候。」とあり、続いて、「初メ、死者ハ皆火葬ニシテ、遺骨ヲ親戚ニ送ルはずニテ、東西本願寺ヨリ僧侶四人まで従事シ、死者ヲ取り扱ひおり候へども、病勢日々激烈ニ及ビ、毎日入院スル者百余人モこれあり、一時ハ入院患者はほとんど千人モノ多キニ達シ、したがっ

テ、死亡スル者日々ますます増加シ、実ニ惨状ヲ極メ候。折柄従軍僧侶ノうちニモ死亡者これあり。遂ニ一々火葬スルコトありハズ、遺憾ながら、頭髮のみ送ルことニ相なり候ところ、これまた取ルことあたハザル悲境ニ陥リ、まことニお気の毒ニ山々ござ候。(略)」(明治二十八年五月一日付)

ここに「悪疫」とはコレラであり、病舎は戦場に劣らぬ惨状で、遺族には病死者の頭髮すら送られて来なかつたのである。

『日清戦争』(檀山幸志)によれば、「澎湖島作戦における犠牲者は、戦死者四名に負傷者二六名であったことから、病死者(七三六名)は戦死者の一八四倍にもなっていた。上陸地に仮設した病院には、二〇〇名余の患者を収容したもののまったく間に合わず、文澳杜の西に開設した病院も即日いっぱいになり、やむなく周辺に七〇余の天幕を張って患者を収容するという悲惨な状況にあった。」

三、「悪疫」はコレラだけではなかった。明治二十八年五月に台湾上陸した近衛師団長北白川宮能久親王は、十月台南においてマリアアで亡くなった。明治戊辰のときには輪王寺宮といひ、江戸東叡山にいた人である。森鷗外の『能久親王事蹟』(鷗

外全集」第三巻)では、北白川宮の「悪疫」の記述は十月十七日から多くなる。

「宮は明日嘉義を發せさせ給ふべき準備をさせ給ふほどに、夜に入りて發熱せさせ給ふ。師團軍醫長木村達診しまつるに、舌の白苔を被れる外、徴候の認むべきなかりき。達は瘧(おこり)と診断しつ。」

六日後、「二十三日、朝の體温三十九度、二。脈百二十至おはしき。午前十一時新に選び定めたる家に移らせ給ふ。宮の居させ給ふは、半ば床板を張り、半ば直土(ひたつち)のままなる、疊四枚ばかりを敷きつべき室なり。幅三尺の窓に玻璃戸を立つ。藤の臥床一つ求め得て、宮を寢させまつる。午後三時諸症稍増悪せさせ給ふ。(略)此日より客に逢はせ給はず。」

連日にわたり、体温・脈拍・呼吸など、症状の記述が日記風に続く。

「二十八日、午前三時三十分脈不正にして百三十五至。五時體温三十九度、六。脈百三十六至呼吸四十五。四肢厥冷して冷汗を流させ給ふ。人事を省せさせ給はず。龍腦の皮下注射・コニヤック酒の灌腸をなしまゐらす。七時十五分病革(すみやかに)なりて、幾ならぬ薨せさせ給ふ。」享年四十九歳。

「御衣は素絹の單衣、白き麻の襦袢、白き紋縮緬の帯、白足袋にて、紋縮緬の敷布團を敷き、同じ地質の掛布團を掛けまゐらせ、夏軍衣袴を添へまつりぬ。御柩は厚さ一寸五分の樟板もて、縦七尺幅四尺深さ二尺に作

らせ、裏面に亞鉛板を張り、御遺骸の周匝(めぐり)には朱と石灰とを填む。御柩の覆は紺地紋緞子もて縫はせ、上覆は紺緇子もて縫はせつ。御柩の臺も樟もて作らせつ。」「(十一月)四日、(御柩を載せたる)舟横須賀の港に入りぬ。勅使土方久元至る。(略)夜御柩を汽車に移しまつりて、横須賀を發しつ。」

事蹟を綴っている鷗外の謹厳な顔が想像される。兵と北白川宮とは、その扱いに天と地ほどの差があつたのである。

四、それでは、相田代吉さんの遺骨はどうなつたのか。

「参謀本部が編纂した『日清戦史』では、「死者千名二及へり」とある。これら死亡者の遺骨は、その後に慰霊塔とともに建てられた墓地に埋葬され、千人塚とも呼ばれたが、現在は撤去され跡形もない。」「(日清戦争)(檜山幸夫)」

確かに、インターネットで検索してみると、「今の澎湖島には、日本軍の上陸地に建てられ

ていた明治二十八年混成枝隊上陸記念碑もなく、千人余の戦死・病死者を祀つた(千人塚)と呼ばれた陸軍墓地も徹底的に破壊されてしまい、一かけらの遺骨も拾うことは出来なくなっている」という記述に出会う。

相田代吉さんも、「一々火葬スルコトあたはず」して、千人塚に埋葬されたものと思われる。

なお、「撤去」と「破壊」とは、意味合いが異なる。占領軍の記念碑を大事に保存する人はいないが、墓地まで破壊されたことは、この戦いの実情が窺い知れる。

五、戦争記念碑は、これをつくり顕彰する人たちにとっては誇りと哀悼の表現であるうが、後世これを同じ気持ちで受取ることは不可能である。

戦場で病死した北白川宮には騎乗の像が残るが、今日、これを眺める人のこころにはどんな思いが宿るものか。

矢作の春光院には、供出した鐘に代えて、昭和二十五年に新しく製作した梵鐘がある。その説明板には「梵鐘の響くところに永久の平和を」との一行がある。私たちの日々の生活には、戦さの像や碑ではなく、鐘の響きこそ相応しい。

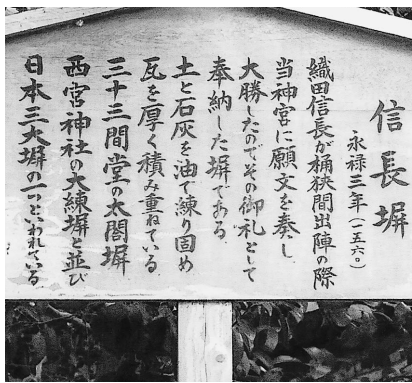
信長塀

「服部小平太槍をつけ……」

永祿三年(一五六〇)五月十九日、尾張清州城主信長が八倍余の陣容を省みず、駿河・三河・遠江に勢力を持つ今川義元が全国統一の夢をいだいて西上への路を、桶狭間(詳しくは桶狭間北方一、五kmの田楽狭間)に風雨をついて本陣を急襲、敵将義元の首級を挙げ今川勢を壊滅せしめたくだりである。

信長は出陣にあたり熱田宮に戦勝の祈願をしたが、凱旋の際、宮に立ち寄り社領を囲む土塀を寄進したという。この地では以来「信長塀」と称し今日まで保存されて来た。

神苑に建つ掲札に曰く(写真)。



田中

豊みのる

昨春秋、名古屋に在住する姪が神苑にあると伝えられる楊貴妃の墓を調査研究中、関係者からこの「信長塀」の瓦一枚を頂く事が出来た。姪は感激のあまり重さも省みず揚々と持ち帰つた様である。歴史好きの私には是非見せようと来足する妹夫婦に託して寄越したが、瓦とはいえず話から想像した屋根に葺く様な反りはなく、土塀に塗り込められた板状の瓦であつた。ズッシリと重く、手に僅かに感じる湿り感が、四四〇年の年月と歴史の深さを感じざるを得なかつた。

余談ではあるが、義元に一番槍をつけた服部小兵太は、後に采女正(うねめのしょう)と名乗り信長が本能寺に自刃後、秀吉につかえ幾度の先陣を駆けめぐつた末、蒲生氏郷が會津に転封の後の伊勢松坂城主(現在の松阪)に封ぜられるが、合わせて関白秀次の家老を仰せつかり入国は果たせなかつた。秀次の失脚の際、責任を問われ切腹したという悲運の士でもある。

とどげ、モンテンルパの空へ 俘虜収容所からの釈放を願って

武田敏治

太平洋戦争が終結、戦勝国十一ヶ国の代表判事により、我国の戦争責任者を裁いたのが極東国際軍事裁判(東京裁判)であった。

昭和二十一年(二〇二六)の昭和天皇の誕生日四月二十九日に起訴し、昭和二十三年の皇太子だった現天皇の誕生日十二月二十三日に東條首相以下七名を処刑した。その間二年八ヶ月をかけて行われた。

これは、皇室も戦争責任があるものと、国民に強く認識させようとする狙いがあったといわれている。

十一人の判事のなかで、ネール首相の懇請でカルカタ大学の総長を辞任してこの裁判に参加した唯一の国際法学者、インドのパール博士はその意見書のなかで

「この裁判は、法律に基かない裁判で、勝った国の指導者が敗戦国の指導者をみせしめのため処刑した凡そ国際正義とは無縁の儀式化された復讐劇だ」と論破した。

裁判を通して、日本及び日本

軍に対する誹謗や犯罪は、噂話であろうと造り話であろうと総てをとりあげ、これを実証する必要もなく、偽証罪に問われることもなかった。

戦勝国は東京裁判で「人道に反する罪」として多くの日本人を処刑したが、広島、長崎への原爆投下、東京大空襲をはじめとする各都市への無差別爆撃、日ソ不可侵条約を侵犯して六十万人に及ぶシベリヤへの強制連行、そして六萬人を死に至らした反人道的行為には一切触れることを許さないというものがあった。

昭和二十六年九月、サンフランシスコ対日講和條約が結ばれるまでの占領期間中、新聞、定期刊行物、單行本、演劇、ラジオ等総てのものが検閲の目に曝されていた。

戦勝国への批判、東京裁判への批判、占領政策への批判、満州での日本人処遇への批判等、三十項目にわたって禁止され、総ての表現、言論活動は拘束されていた。

日本の指導者は、東京裁判で

弁護人の主張も判事の耳には届かず一方的に裁かれたが、海外の収容所にはまだ刑が確定せず、運命の日を待つ大勢の日本兵が収監されていた。

アジア各地では、「通例の戦争犯罪及び人道に対する罪を犯した者」を裁くいわゆるBC級裁判、二、三四四件が四十八法廷で行われていた。

俘虜への残虐行為など当然と思われるものもあったが、復讐的な「勝者の裁き」人違いの処刑もかなりあったという。

処刑台に消え、また、暗い獄窓につながれた軍人、軍属のなかに朝鮮、台湾の人たちも少なくなかった。

「ばんざい」を叫びながら絞首台に消えた無実の兵士、上官の命令に疑問をもちながら逆えず、その責任をひとり負って死んでいった下級將校も多数いたといわれている。

戦争とはつまるところ人間と人間の殺しあい、国と国との間に渦巻く狂気のなかで戦犯が生み出されていった。

戦犯という言葉から極悪非道の行爲をしたように思われがちだが、時に臨み私情を捨て祖國の必勝を信じ任務を遂行した結果、処刑されていった不運な兵士たちも多い。

BC級戦犯のうち実に一、〇

六八名が真実を述べる機会も与えられず、身の潔白を証明する人も無く刑場の露と消えていった。

終戦直後の厭戦感や敗戦という強烈なショックの爲、ほとんどの日本人が先の戦争そのものを日本の犯罪だと認め、戦勝国の思うがままに忍従を強いられていたのだった。

しかし、昭和二十七年四月二十八日、サンフランシスコ講和條約が発効され、日本が主権を回復したこともあって

「太平洋戦争は連合国による種々なる圧迫と威嚇が原因で、日本は生存のため自衛権を行使するにいたった」

などとそれまで目に触れることのなかった論評が、書店に並ぶ雑誌や戦記物の隨所に見られるようになってきた。

その頃だった。講和條約発効後に日本週報社の『大本營発表』著者・松村秀逸(元大本營報道部長)を見た時、太平洋戦争に至る数々の経緯について、ここまでは活字にしているものだろうか、驚きと途惑いさえ感じたものだった。

占領という威圧感から開放されて連合国は正義の戦いだから勝ったんだという思い込みも徐々に薄らいできた。

戦争には、およそ正義と名の

つく戦いなどはない、敗れた國の兵士だけが戦犯となり、戦勝國から罪を問われる者が出ないのは納得できない。

高校三年生だった私たちの日常の会話のなかにも、そのような話題がもちあがってきた。

二期のある日のこと、柔道の練習が終ったの帰り途、駅前のレコード店の前にさしかかった時だった。

渡辺はま子が歌う「モンテンルパの夜は更けて」の哀愁のメロディーが流れてきた。

部員のひとりがつぶやいた。「秋の体育祭の仮装行列には、これをやろう」と早速レコード盤を購入した。

南洋の島々には、いまだ祖国の土を踏めず大勢の日本兵が帰国を待ちわびている。

早く収容所から釈放してほしい。その願いを込めて柔道場の畳の上で輪になって覚えた。

当日、身に付ける軍服や巻脚絆、軍靴は、まだどの家でも押入れの奥や物置に仕舞ってあった。

監視役のMPの服装は、ポライスカウトの団員の家から借りてきた。

快晴の下、体育祭のメイン行事、仮装行列がはじまった。私たちは収容所の重労働の現場を演じることになった。

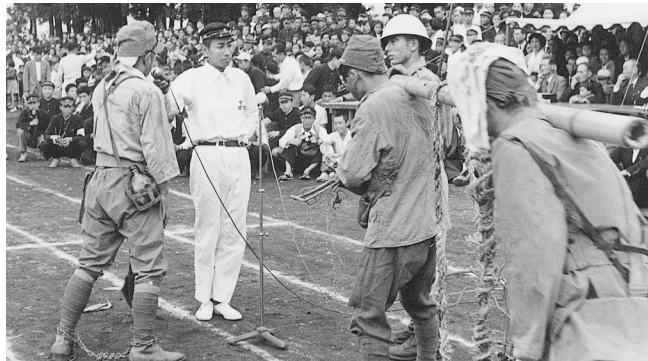
顔には泥を擦りつけ、檜林の隅の大石を積み込んだ畚を担ぎ運動場を一周した。

1 モンテンルパの夜は更けてつるる思いにやるせない遠い故郷しのびつつ涙に曇る月影に

2 優しい母の夢を見る燕はまたも来たけれど恋し我が子はいつ帰る母の心はひとすじに

3 南の空へ飛んでゆくさだめは恋し呼子鳥モンテンルパに朝が来りや昇る心の太陽を

胸に抱いて今日もまた強く生きよう倒れまい日本の土を踏むまでは



昭和27年10月19日(1952) 小田原高校柔道部
(暑さ除けに手拭を被っているのが筆者)



腹の底から声をふりしほるよ
うに歌った。
本部席の前で隊長のO君が、
兵士の心情を訴えるように力
いっぱい迫真の演説を打った。

私たちは国の命令で戦場に
征った。

上官の指揮に従い、祖国日
本の爲に死を覚悟で戦って
きた。

しかし、戦いに敗れ戦犯の
汚名を着せられました。
戦勝國でも、敗戦國でも戦
場でやってきたことには変
りない。

敗れた日本の兵士というだけ
で、どうして身に覚えの
ない罪まで負わなければな
らないのか。

処刑は免れたものの灼熱の
炎天下、過酷な重労働が連
日続いている。

しかし、もう体力は限界だ。
國を護れと命じた日本は、
私たちを見捨てていないだ
ろうか。

早く、父母の待つ故郷へ帰
りたい。
そして、最後に次のように結ん
だ。

戦争が終つてすでに七年
たった。
日本は敗れたとはいえず平和
を謳歌している。

しかし、いまだ海外には収
監されている同胞が明日の
生命も分らずに苦しんで
いる。

このまま見過していい
ものだろうか。

O君の気迫のこもった熱弁
に、本部席の周りから沸き上る
拍手は、しばらく鳴りやまな
かった。

戦時体験を積んだ当時の高校
生の血潮が滾った青春のひとこ
まだった。



「モンテンルパ」はフィリッピ
ンのマニラ市の郊外にある。

そこには旧日本人兵士一五〇人余りが抑留されていた。その中にはBC級戦犯の他、えん罪による下級兵も含まれている。それは、アジア諸国を戦火に巻込んだ旧日本軍に対する憎悪はフイリツピンとて例外ではなく、その対日感情の対象としてのものであったという。

戦時中、慰問に赴き、兵士の志気を鼓舞してきた渡辺はま子は、その責任感から戦後は日本の収容所の慰問を積極的に行っていた。

そんな彼女のもとへモンテンルパの話が知らされる。

彼女は大きい心を痛め、日本の留守家族の手紙や慰問品を現地に送ったり、現地の兵士達とも文通をかわすようになる。

そして、ある日、抑留兵士の釈放嘆願の活動をしていた加賀尾秀忍氏から歌が送られてきた。その歌は「モンテンルパの夜は更けて」絶望感の中、故国に思いをはせる収容兵士が書いたものだった。

彼女は早速、ビクターに持ち込みレコード化された。

そして現地に慰問に行くことを決意する。

まだ、戦後補償も解決しておらず、当然、国交は断絶している状態での戦犯慰問は困難をきわめたが、苦勞の末に昭和二十

七年のクリスマスの日、モンテンルパのニュービリティ刑務所にたどり着いた。

兵士達や加賀尾氏と一緒に「モンテンルパの夜は更けて」や日本の愛唱歌を涙の熱唱。兵士達も、そして、フイリツピンの看守達もみんな泣いた。

翌、昭和二十八年五月十六日、加賀尾氏はキリノ大統領との面会を許される。

渡辺はま子から送られた「モンテンルパの夜は更けて」のオルゴールを献上品として持参した加賀尾氏は、何も言わず、ただこのオルゴールを大統領に聴かせ、静かに席を立った。

六月二十七日、日本人戦犯はすでに亡くなった人もいたが、残りの一〇八人全員が釈放された。

「私は誰よりも日本人を憎んでいる。妻と子供を日本人に殺された。けれどもあのメロデーを聴きながら思った。憎しみからは何も生れない。愛だけが未来を開くのだ」との言葉によって：(インターネットホームページ懐しのメロデーより)

五百万人もの署名が添えられた戦犯釈放嘆願書と渡辺はま子が歌う哀愁のメロデーに感動したキリノ大統領の人間愛が、全員釈放のドラマを生んだ。

俘虜釈放を願って精一杯訴えた私たち高校生の声もモンテンルパの空に届いたのだろうか、体育祭の日から二五〇日後のことだった。

そして、海外の各地に収容されていたBC級戦犯も、サンフランシスコ講和条約締結時に減刑、或は仮釈放され昭和三十年五月三〇日をもって全員が釈放された。

参考文献

県立小田原中学第三七回卒 石川雄治氏執筆『近現代史の歪によって失われた国家観』



向日葵

剣持芳枝

旅に寝て夜干の梅を案じけり
爽竹桃くせある髪を疎みけり
桐咲くや甘酒茶屋の深庇
行く当てのなく香水をひと吹きす
向日葵や首の坐らぬ子を抱きて
銘入りの庖丁使うはたた神
風鈴や踏石に置く男下駄

語り部委員会からのお知らせ
語って!!

まだ、やっていること。
もう、やめてしまったこと。
—我が家、我が地区の年中行事—
☆10月17日(日)に市民会館で
語り合いませんか?

ふるさととは遠きにありて(上)

待ちわびる引揚船

植田博之

昭和二十年(西暦)八月

この年の夏は、天に抜けるような青い空、暑い毎日が続いた。大連市(中国東北部)日の出町の満鉄(南満州鉄道株式会社)社宅に住んでいた。

八月九日、朝のことである。夜勤明けで帰宅した父が大声で、「ここに来て座れ」と日頃にな

い険しい表情で私を呼んだ。「今朝、ソ連軍がソ満国境を突破して攻めてきた。非常召集で、これから会社に戻る。これから先、お父さんはどうなるかわからないから、しっかりお母さんを助けて、みんなを連れて小田原へ帰るんだ」

当時私は国民学校五年生、女学校一年生の姉、五歳と二歳の弟二人、八ヶ月の身重の母。長男として、父の言葉に責任を感じた私ではあったが、なすすべもなく小田原の自家の住所だけを反芻していた。

私に言い終えると在郷軍人であった父は、玄関に何時もつるしてあった奉公袋をもって、身支度もそこそここに出かけた。国境近くを守っていた日本最

強の関東軍も太平洋戦線の戦況悪化に応じて南方へ転戦、本土決戦に備えて内地へと移動、すっかり手薄になっていた。

一方、敵ソ連軍は五月にベルリン陥落、ドイツ戦線の精強部隊を極東軍に補強、破竹の勢いで満州を南下した。そして在満同胞の悲劇が始まった。

幸い父は、三十九歳で兵隊としては高齢であったためか、二三日して帰ってきた。中には何ヶ月も帰らなかった人、現地召集兵となつて、シベリア送りになった人もいた。

八月十五日、強い陽射しの中、本格的な防空壕掘りを手伝っていた正午、終戦の玉音放送を聞いた。日本の歴史的大転換をここで迎える事となった。

抑圧されていた一部の満州人は戦勝国、中国人として復活し、その勢いで暴徒となつて公共施設や、恨みに思っていた日本人にリンチを行った。

しかし植民地として、中国人を差別していた日本人ではあったが、大勢は永い年月共に働き指導してきた絆は失っていない

かった。

八月二十二日、ソ連軍は満州南端の都市、大連に進駐、赤い旗を振って歓迎するよう指示が出て、日本人市民は複雑な気持ちで恭順の意を表わした。

大連市はロシア時代の名前「ダリーエ」となり、ソ連軍の軍政下におかれた。市中の治安維持は保安隊(中国人)が当たり後に八路軍になった。日本人の取り纏めは左翼邦人を中心とする労働組合が、市政との連絡にあたっていたが同胞の代表としては全く無力の立場だった。

母校(日の出国民学校)の隣りに大連実業学校があつてその体育館に満州奥地から、持てるだけの荷物を持って脱出してきた開拓団の人たちが収容された。町の人たちは当面の生活に必要なものを届けながら、その体験を聞いた。

ソ連参戦で、最も多くの犠牲を払ったのは開拓団の人々で、祖国に見放された棄民として脱出、その艱難辛苦は筆舌に尽くせないものであった。

特にソ連兵士の傍若無人ぶりは瞬く間に在連同胞二十三万人に伝わり、戦々恐々とした。

治安は日増しに悪化、泥にまみれて、真っ赤な顔をして進駐してきたソ連軍兵士達は、オカミのごとく、同胞に対して、

略奪、婦女暴行、射殺、破壊の限りを尽くした。十二歳の姉はソ連兵を怖がり坊主頭になつて、私の服を着た。

九月四日 身近に起きた最も心の痛む悲しい出来事は、星野先生射殺事件である。九月になつても二学期は始まらないので友人達と、転山山麓にあった学校の様子を見に行った。土手に伏せながら、運動場越しに校舎を見ていた。

そこにはソ連将兵四、五人と中国人が中国語の星野先生となにやら話している。

突然パンパンという銃声が聞こえてきた。夢中で家に戻りながら、もし撃たれたとしたら、多分日本人であり中国語の堪能な星野先生であろうと想像した。すぐ町中に知れ、やはり星野先生が射殺されたと知った。

終戦直前、日本軍の要請で物資が講堂に保管してあったが、終戦直後、州庁役人が持ち去つた。一部(砂糖)を日の出町町民に配給し講堂には何もなかった。

嗅ぎ付けたソ連兵は中国語のできる先生を相手に詰問し、そしてくまなく校内を探索、見当らなかつた腹いせに、先生を撃つて引き揚げたのだった。たまたま登校していた六年生の小玉宏子さんはこの事件に遭遇、病院に運ばれる先生の鮮血に染

まった担架を追い、「先生、先生」と泣き叫びながら走ったという。『大連 空白の六百日』 富永孝子著 から)

鎮魂歌 星野先生にさよぐ

藤林経一

星野先生
砂糖の味はにがいものなのですね
国民学校五年生だった私になめた
その時はとても甘かったのに
それを食べた日の出町町民のため
にその砂糖のために

星野先生は黙って死んで行かれた
日本軍の残していった物資を
ハイエナのように嗅ぎまわり、口
スケに通じた八路军の手先に
たった一言

日の出町町民が食べたといえはよ
かったのに
日の出町町民をその教え子を
こよなく愛した先生は断固言わな
かった

身代わりとなって私達の学びの庭
で覚悟の銃殺を立派な最後を遂げ
られたのだ

日の出町町民ならみんな知ってい
る星野先生の気高い心を

ああそして三十有余年

星野先生

砂糖の味はにがいものなのですね

戦後三十五年、同窓会の小冊
子に書かれた同級生藤林君の詩
である。

九月十日、ソ連軍、大連市警
務司令官ヤマノフが更迭、コズ
ロフ中将が着任してから、治安
はやや落ち着いた。

そして武装解除させられた兵
隊や警察官は連行されその後シ
ベリヤへ。役人、先生、満鉄社
員等、ほとんどの日本人は職を
失った。家財道具、貴重品や着
物など街に出て売り、食べ物に
換えていった。

父はソ連進駐軍の車両組立や
トラックの運転手を薄給でやっ
ていたので、姉も私も生活を少
しでも支える為に、他の生徒達
と同様に南京豆の立ち売りや
トーフをバケツに入れて町中を
売り回った。

母がよく言っていたが、寒い
冬の早朝、幼い子供達が、「オ
トーフ」といながら回って来
ると、胸が痛んだそうである。

十一月、中国人による大連市
政府が成立すると、改革、開放
路線で公共建物はすべて接收さ
れ、日本人住宅は「住宅調整」
の名のもとに、徐々に中国人に
譲ることになった。

引揚げるまでの一年半の間に
同居や小さな家に、四回引越し
て、学校も併合しながら二回も
転校した。この間、何を勉強し
たのか全く記憶にない。

二十一年(二五)四月に各地で
永い収容所生活を強いられてき

た北満、中満からの難民を優先
して引揚げが始まり、十月まで
に百万人の引揚者が帰国した。

そして大連市在留邦人には敗
戦後二度目の厳冬を越すあと半
年の試練が待っていた。

大連の秋は足早にやってくる。
アカシヤやプラタナスの枯れ葉
がカラカラと蒙古風に舞う。
住む家も、市南部の桜花台と
いう町の小さな家に追いやられ
た。

食糧も燃料も乏しく、ストー
ブの上で、高粱の飯を炊く時に
のみ燃料を使い、その周りに兄
弟が集まり、小さな手をかざし
て暖をとった。

昼間からの余熱がないから夜
は、屋外とほぼ同じ零下二〇度
にもなってしまう。防寒服や防
寒帽をまとったまま寝た。

「もうすぐ、我々の乗る引揚船
が来るぞ」この一言で、苦しい
生活を強いられながらも希望を
抱いて頑張っていた。この時期、
在留邦人たちの生活は限界に近
い状態にあった。

在留邦人の引揚げはいよいよ始
まった。十二月三日第一船、永
徳丸が祖国に向かって初めて出
航した。

十二月二十日に日本人の学校
は二学期の終りをもって閉鎖、
私達の学年は、繰上げで、小学
校を卒業した。この六年間、大

日本帝国の勝利を信じ、学び、
鍛え、そして突然の敗戦、植民
地での敗戦国民の地獄を見た。

年が明けて学校にも行けず、
ひたすら船を待つ生活であった。

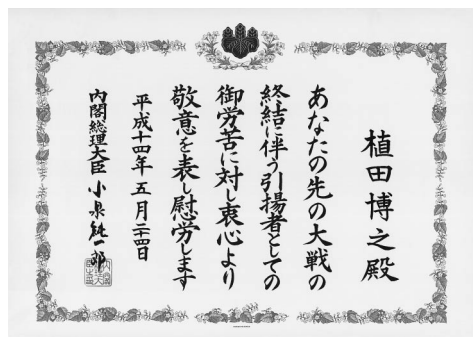
近所の山本さん宅に、かつて
の杜宅の子供達が集まるように
なった。山本さん四兄弟が本を
読んで聞かせてくれたり、劇を
やったり、歌も教えてもらった。
歌は望郷の歌がほとんどで、時
には『たれか故郷を思わざる』
を大合唱した。戦後、先生に教
えてもらった啄木の詩を思い出
した。

ふるさとを出で来し子等の
相会ひて
喜ぶにまさる悲しみはなし

二十二年(二五)二月十一日
いよいよ待望の、その日がきた。
雪が舞う寒い日だった。

最後の日に食べるんだと父が
言っていた米に、ポミー(ト
ウモロコシ)を入れたお粥を喜ん
ですすって食べた。昼の弁当は
最後の全財産で買ったピンス
(もろこしパン)、かんころ餅(芋
の粉パン)、である。収容所に入
れば、何とかなると見込んでの
の大盤振る舞いだった。

荷物は昨夜、父とみんなで相
談、分担を決めながら作った。
ふとん包みが二つ、行李が二つ、
茶箱が一つ(父はアルミ板の内張



▲国の引揚者等に対する特別基金の事業より交付されたものである。

りを剥して中に数枚の写真を隠した。書類、写真、軍票は持出禁止手で持てる鍋、バケツ、七人分の食器、これらを父の作った荷車に積み込んだ。母は妹を背に、兄弟は体に応じたりユツクサツクを背負った。

父母と姉十三歳、私十二歳、上の弟六歳、下の弟四歳、妹一歳の家族七人。この難民家族が引揚げをするのに必要な規定内ぎりぎりの支度だった。残してきたあの皮のグローブがいつまでも心残りであった。

九時、集結場所嶺前小学校を指して我が家を出た。雪が舞う電車道を三十分ほど坂を下り、集結場所についた。

団はD五二団、赤い三角のきれが印だ。D地区は合計、約一六〇〇人の難民達が集結した。

父の知り合いの青年が一緒に車を曳いてきてくれた。別れ際に、彼は支那語やロシア語を忘れるなど力強く言った。多分この体験を忘れるなどという意味が込められていたと思う。

車は彼が曳いて帰ったが、何故か彼は中国に残るといつていた。

午後三時、中国人が運転するトラックに乗って、埠頭に近い約七キロ離れた旧日本軍の兵站部「関東倉庫」に入った。そこでソ連軍将校達(女性を含む)による検閲を済ませた。冷たいコンクリートの床の上で順番を待ち、昨日五時から今朝(二月十二日)三時までほとんど寝ていなかった。

検閲をパスすると少し離れた兵舎へ移動した。冷たく星が煌き、だれかが悔し紛れに破った赤、青の軍票が寒風に舞っていた。団長以下約百人、無事収容所に入所した。直ちに臨時の食事が配られた。急炊でガンタメシ(生煮え)のようではあったが飢餓状態であったためか、久しぶりの白いご飯、塩鯖はうまかった。

十四日(収容所四日目)乗船命令が出た。吹雪の中を外に整列

した。寒くて下の弟は泣き出す。「足踏みをしろ」父が叱る。泣きながらパタパタやる四歳の弟が痛ましかった。かつて満州の入り口といわれた乗客専用の第二埠頭、待合所(二階)に着いた。大きな貨物船が停泊していた。これだ、わくわくした。

しかしどうゆうわけか我々の団はあと送り、D五三、五四の団の乗船が先になって、この一階待合室に一泊を余儀なくされた。

風除けに畳を立て、怒りと厳しい寒さに堪えた。トイレが遠く、信頼できないソ連兵の歩哨が立っていたから、その夜何回も家族の護衛についていった。

十五日、東の空が明るくなり、久しぶりの晴れだった。寒さは相変わらず厳しい。父が電話で元の職場(満鉄埠頭消防隊)の部下達(中国人)に別れの挨拶をしてきたと言った。家に遊びに来ては宴会をやっていた連中であつた。父は暫らく黙して語らなかつた。

昨夜停泊していた貨物船はあとの団を載せて出航し、沖に朝日を浴びて白十字の病院船が待っていた。これに乗船することになった。

二階の待合室から、弟の手を引いて棧橋を渡った。

これが大陸との別れだった。午後一時出航、五色のテープもなければ、銅鑼の音もない、送る人は次に乗船するわずかな同胞だけである。かつての賑やかな出航風景はない。しかし久しぶりに聞く故国の歌『螢の光』の船内放送が流れ、ここはもう日本だと思えてきた。

船が動き始めると皆デッキに上がった。南山、南山麓、そして、転山、日の出町が手に取るよう見える。それぞれの思いで眺めていた。港外に出るまで動かない老夫婦もいた。多分第一のふるさとだったのであろう。石をもて追はるるごとくふるさとを出でし悲しみ消ゆる時なし (石川啄木)

大連在留邦人の引揚げは、二月三日に始まり翌二十二年三月まで、計七十七便の引揚げ船が迎えに来て二十万四千人が引揚げた。

我々は第三十三便、船は雲仙丸、(三、一四〇トン)一、七〇〇人が乗船した。戦中は病院船であつた。代表的な引揚・復員船の高砂丸(九、三二五トン)や興安丸(七、一〇三トン)に比べれば半分以下の大きさだった。外洋(黄海)に出たらとたん揺れ始めた。

船室の丸窓に海面が押し上がり、次には谷底のように海面が下がった。みんなの船酔いはひどく、ほとんど食事もせずに横になっていた。壁にかけてあった水筒が四時から八時の振幅で動いた。船内放送で、日本の歌が唯一の励ましと慰めであった。

十九日、(出航四日目)二時頃、懐かしい内地の島々が見えてきた。満州の冬の山は、雪山か禿げ山になるので、早春の緑に覆われた島々はことさら美しく、安堵感と混じって涙が込み上げてきた。

国敗れて山河あり、
城春にして草木深し……

杜甫

多くの引揚者、復員兵がこの詩を思い起こしたことであろう。

あとで知ったが、そこは西海国立公園の九十九島であった。島々に迎えられるながら佐世保湾に静かに入り停泊した。

夕刻、米軍兵士による臨検が行われた。初めて見る米兵はソ連兵に比べて、大きくスマートで清潔感があった。鬼畜米英と歌に歌った頃をすっかり忘れてしまっていた。

静かな港内に停泊の夜、船員が放送劇や歌などで、お別れの慰労会をやってくれた。

二十日、朝、はしけに乗り移つ



▲引揚第一步記念碑
現在の「浦頭」にて

て「浦頭」へ揚陸、祖国への第一歩を踏んだ。すぐにDDTの白い粉を頭から体中に吹きかけられた。この「洗礼」により浦島太郎になったとみんなが笑った。

検疫を終え、相当な距離を歩き、ひと山を越した。さらにポン船に乗って、佐世保引揚援護局収容所(戦時中は針尾海兵団、現在ハウステンボスのあるところ)に到着した。

途中「引揚げの皆さんご苦労様でした」と書かれた大きな横断幕が嬉しかった。

別便で帰ってきた同級生の稲荷、南、両君に会い、お互いに無事であったことを喜びあった。

「めしあげ出ろ」海軍調の号令が掛かると、班の代表が人数分の食事を取りに行き、各世帯に配る。毎度の食事は楽しみだった。宿舎は出入り自由、何処を向いても日本人ばかり、特に嬉しかったのは、日本人の警察官がピストル、警棒を下げて、巡回していることだった。

引揚証明書の発行と六百日の

支給、衣類十数点の配給など帰国手続きが毎日続き、出発日が確定した。父は実家の様子を気にしながら電報を打った。

二十五日朝、五泊六日、お世話になった収容所を出発し、また行列をつくって、大村線南風崎(はえのさき)駅に行く。

東京行き引揚専用列車は満員の関東方面の引揚者とその荷物を載せて、十時に発車した。父はデッキで、他六人はすし詰状態でワンボックスに座った。

広島あたりで日が暮れはじめ、原爆の爪痕、疎らの草の中に墓石だけが目立った。

通路は荷物で満杯、男の子は停車中、窓から小便をした。

根府川あたりから幼い頃の記憶に残る景色が見えてきた。高い鉄橋やメガネトンネル、母の実家の米神。板橋のガードの所から国道沿いに十字町(現南町)あたりが見えてきた。ずっと戦災を心配していた父は「焼けてない」と安心した。

二月二十六日朝九時、小田原駅に到着した。二十三時間の汽車の旅であり、大連の家を出て、十五日目であった。

ホームには伯母や従姉妹が迎えに来てくれていた。喜びと、痛々しさが混じった目で、やさしく声をかけてくれた。

朝日に光ったなだらかな地下

道を上り、改札口を出た。夢にまで見た小田原である。安堵と懐かしさで涙が込み上げてきた。

異国で望郷の念を抱きながら帰国できなかった方々、また帰国途中、精根尽き果て亡くなった方々へ心から哀悼の意を表します。私達が、平和への願いをこめて語り継いで参ります。

南風崎駅	
南風崎駅は、昭和20年10月から昭和25年4月までの間太平洋戦争終結に伴い、海外から佐世保港浦頭に引き揚げてこられた方々がそれぞれの故郷へ向かわれた思い出の駅です。	
(日本人の引揚者総数)	約6,290,000人
(佐世保港への引揚者数)	1,396,468人
(引揚列車の総本数)	引揚列車 1,147本 一般列車 538本 計 1,685本
(佐世保市)	

▲今は人影もない無人駅、案内板だけが淋しく語り継ぐ。

参考資料

『大連 空白の六百日』

富永孝子

『大連物語』 朝野幾代

『満鉄』 西澤泰彦

『二億人の昭和史』 四

毎日新聞社

平和祈念展示資料館 資料

我家の引揚証明書 他

俺のシベリア俘虜記

青木英雄

俺が十九のときだった。満州の延吉(えんきち)で終戦を迎えた。昭和二十年の十月頃、発疹チフスで三十八、九度の熱が出たから入院したが、医療も何もなかった。バラックのような病棟にアンペラ敷いて寝起きしていた。板にゴザを敷いて寝てたんだ。

すぐに治ったので衛生兵の代行になった。俺が知らねえまに班長(曹長)が衛生兵の代行にしたらんだ。戦争中は歩兵砲を担いだ一等兵だった。

病棟には百人以上の兵隊がいた。病棟といっても牛馬小屋を改造したものだ。

チフスが蔓延してバタバタ死んでいったよ。薬がなくて看護婦がたまに見に来てくれたが始末がつかなかった。何百人と死んだんだ。

それからがひどくてね。大八車に載せて荒縄で縛って運んだよ。幽霊の行列みたいだった。俺が絵を描いたら描いて残したよ。

て安置しておいたわけだ。そして雪がとけ始めた翌年の三月頃には、野犬がきてそれを食いちぎっていくわけだ。それで上の人がソ連にお願いしてブルドーザーで大きな穴を掘って埋葬したんだ。

食糧か。三月に入ったら食糧が良くなったんだな。北鮮にはすぐくメンタイ(スケトウダラ)が獲れるんだ。それを食ったから身体を保持できたと思うんだ。米は白米だった。

衛生兵の代行と産業班(労働班)とが一緒にされて、同じ兵舎に戻った。それが三月から四月だった。

ソ連に入ったのは四月十五日から二十日の間。「いよいよ俺もソ連行きか」と思った。忘れもしない、二十四日の日には、「今日(今日は)うち(紀伊神社)のお祭りだ」と思った。

琿春(コンシュン)から行軍してソ連のクラスキーに入った。クラスキーに行ったら食糧が悪かった。大豆とモロコシ。

貨車の中に裸で入って、デソカメラ(消毒薬)を噴霧された。

蒸気で蒸されるんで臭せえたらなかった。

クラスキーでは野原で、駅は日本から略奪した物の倉庫だった。そこで道路補修したり軽い作業をしていた。

アンチヨムからクラスキーへ通じる送電線の工事が始まったんだ。日本人は鉄塔を一本建てると百割、慣れてきて二百割、三百割となった。こうりゃん飯は鼻について、量が増えても食えたもんじゃない。

それに平行して、アンチヨムからウロシロフまで道路を造っていた。一番嬉しかったのは朝鮮からメンタイが入ってきた。メンタイの煮付けで栄養をつけたことだ。

最後は兵器廠にいった。「これで俺はお終いか」と思った。銃殺されるのかと思ったからだ。「それは国際法からして許されない」という者がいたよ。

ソ連に入る前頃から思想教育が始まった。日本人の将校が吊るし上げられた。

しまいにはスターリンに感謝状を送ったこともあった。ハバロフスクにきてからかな(二十二年頃)。腕のいい大工あがり彫り物を作ったんだ。

アンチヨムで一緒にいたのが吉田正。誰だか知らなかったが、狼よけの火を燃していたとき、

いい声で歌っていた。それが吉田正『異国の丘』の作曲者だった。

青木の友吉さんと会ったのは、ハバロフスクの十六分署だった。夕食を早く済ませて食堂のなかで映画を見ていた。そこでバツタリ隣り合わせた。俺

は谷さんは知っていたが、友さんは知らなかった。「どうもあんたは谷さんじゃないか」と言ったら、「私は谷の弟だ」という。そしたら向こうは俺が姉さんに似ていたらしく、「あんたハルちゃんの弟じゃないですか」と聞いてきた。

「僕はあしたあたり他の収容所へ送られるらしい」と言うんだ。「そうですか、あんたは大変だ」そう言って、五十坪の煙草の半分をやったよ。マホルカというのよ。だから映画を見るなんてもんじゃあねえんだよ。後で吊るし上げられるかもしれないが、外へ出て二人で話した。友さんが帰国したのは昭和二十八年だったな。

俺はあちこち廻された。十六分署は一番労働のきつい場所だった。農場のある収容所に廻されるとあんがい食糧もある、労働も楽になった。そうしたら、「青木、おまえは近々日本に帰れるかもしれんぞ」と言われた。それが昭和二十三年頃か。帰るまでまた鉄塔建てをやった。

帰るときはナホトカから乗船した。そんなときは、嬉しくて嬉しくて。高砂丸だった。タラップに看護婦がずらつと並んで、御苦労様でしたと言われたときは、涙が出た。ほんとに嬉しかったよ。千人くらい一緒だった。日本が見えたら舞鶴で、二月。一面麦畑だった。中には、日本に上陸できないと海に飛び込んだ者がいた。

県の世話課が迎えにきていた。「青木さん、うちは何をやっているんですか」と聞かれ、「三十何円ばかり持って帰ることはない。うまいものを腹いっぱい食べなさい」とも言われた。

弟の正雄と近所の金作の二人が静岡の駅まで迎えにきた。俺が共産主義かどうか心配だったんだな。みかんを箱いっぱい持ってきたので、戦友に配ったんだ。みんな喜んでなあ。お袋がまだ元気で、早川駅まで迎えに来てくれた。

駅を降りたら大勢迎えに来ていた。俺は皆の前で簡単な挨拶をした。

寒い頃だったが、こつち(俺)には暑かった。それで上着を脱いだら、「寒いところにいるから寒さを感じねえのか」と言われたよ。

それが昭和二十五年の二月十六日だった。(青木良一 記)

新刊紹介

○『足柄乃文化』第三十一号(二)

○〇四年三月発行 山北町地方史研究会

一、「箱根権現縁起絵巻(抄録)」(古川元也)

絵巻は山北町指定重要文化財で、天正十年書写という。箱根金剛王院に繋がる修験正覚院に伝来したものと位置付けられている。内容は伊豆山箱根三島社の本地垂迹譚。絵は洗練されたものではないが、『箱根町史』所収の絵巻と対比するのも面白い。本文釈文も付されている。二、「山北町を中心とした足柄地方の『地名』について」(田代道彌) 地名をどう考えるかとして、

1、地名の命名の傾向にも地域色があり、同じ地方色で括られる地域は同じ文化圏に属している。2、各地の多数例を集めて、それらが共通して指摘するところを探し出すのがよい。3、地名は生きていく。A||Oの母音交替例は少なくない」など指摘する。そして、山北の地形の特性や歴史に関わる地名のへなぞ解きを展開する。「山北」「尺里」「向原」についての解説もある。

いづれも植物分類・命名の話を書くような明解さがあるが、地元の人への反応も聞いてみたい。

三、河村城試掘調査(郭部を中心として)(安藤文一)

四、「室町幕府と河村氏(下)」(湯山 学)

五、谷峨白幡神社祭り囃子(久保田裕道)

六、「道祖神祭りの山車巡行」(入江秀弥)

七、「山北地方の方言」(藤井良晃)

『山北町史』民俗編に方言の収録がなく、補うかたちとなる。七一年と八九年の方言調査をもとにしている。特色は、県境を越えて山梨東部の郡内地方(南都留郡)の方言と比較対照していることである。「いびい」「ずねえ」「ぢくどう」「ぢゃんか」「びしよてー」「まじろろっけー」などもある。

八、「戦国期相模河村郷中川と甲斐大窪村」(久保田昌希)

主題は「村の遠征」である。『新編相模国風土記稿』に載る大窪珍らしい記事を紹介し、中川村と大窪村が国境を越えて実力行使をした背景を述べている。

九、地蔵尊「一本三体」考(池谷嘉徳)

十、川口広蔵の売地と貸金の証文(内田清)

荻窪用水(湯本堰)を開発した川口広蔵の金融証文をとりあげる。古文書講座であるが、史料として筆者が発見した経緯や川口広蔵の人間像を折り込みながら解説している。

(青木)

新会員

富田 康裕さん

国府津二〇六一―三二 四七―四六六〇

早野 千秋さん 三五―三三七九

扇町三二―一〇

望月 文雄さん 四七―四七三六

酒匂三二―一九(妙蓮寺)

上田 昇さん 二六―一六

新屋二二―一六

青木 正光さん 三四―〇八七七

東町一―三二―一八

村山 正道氏 小田原市浜町二二―一四

平成十六年三月三日ご逝去。

山田 征子氏 小田原市小台三三八―一

平成十六年二月二十七日ご逝去。

小笠原長久氏 小田原市新屋二―一五

平成十六年五月九日ご逝去。

杉崎 正吾氏 小田原市田島七四八

平成十六年五月十八日ご逝去。

秋山 元徳氏 小田原市扇町三二―一八

平成十六年六月十二日ご逝去。

謹んでお悔やみ申しあげます。

享年八十七歳

折にふれて

高田掬泉

一、再びペンを (昭和二十一年)

明六日から私の職場となるこの机に向って久し振りのペンを執る。今日は節句だが生憎小雨で午前中は子供達のお相手をして過ごしてしまふ。

全く久し振りのペンである。右隣りの僅か数センチの空白が二ヶ年半といふ時間であり、然かもその二年半の時間が私の一生にとって最も波瀾に満ち変化ある時間であるのみならず、日本にとり更に世界にとつても有史以来の歴史的事件の明け暮れであったことに思ひを致せば感慨なきを得ない。更に又今日の私及び私達日本人の立場が、敗戦といふ思ひもかけなかつた事実によつて、我々の予想もしなかつた新しい歴史的立場に立たされてゐる事を思へば如何に名文を列ね、数百言を書きつけて見てもそれで足りることはない。書き度い感想は山程ある。これから暇を得てそれらを時折書き記してみたい。又二年間大陸で暮した見聞を思い出し乍ら記してみよう。

二、てつぼう (昭和二十一年)

初年兵は銃のことを、てつぼうと呼んでよく怒られた。このてつぼうは兎に角私達初年兵の頭痛の種であつた。滝ヶ原兵舎で、撃発をしたま、銃架にかけていたのを古兵に見つかつて分隊一同が捧げ銃を二十分、そして馬鹿馬鹿しくも、「三八式歩兵銃殿申訳ありません」と何十回も言はされたのが、そもそももてつぼうに悩まされた最初であつた。朝食前の手入、演習から帰つて又手入、夜寝る時の手入、手入手入で苦勞したものだ。雨でも降つたらそれこそ目も当てられない。

乱嶺関で討伐に出て民家に泊つた折り、室内の湿気で翌朝銃が真赤に錆びてゐるのを見た時はぞつとする程驚いた。然し私がこのてつぼうに最も苦しめられたのは小室四郎が私の銃を折つた時である。これは討伐に出で厳冬の一夜を小さい村に宿営した折りのことであるが、普段から生命より大事だと口癖のように小言をいはれてゐた銃

を、たとへ自分が手を下さずとも、凍てついた庭に倒して木部の処を折ってしまったのだからその困惑は凡そ想像がつく。外地のこと故営倉にはならなかつたが、私は討伐中に谷底に転落し、両手を高く捧げて銃を毀損から救はふとしたが遂に及ばなかつた——といふ妙なこしらへ事をせねばならなかつた。この銃毀損理由書を書く為めに衛藤分遣隊長にどのくらい厭味を言はれ、三日三晩も苦勞したことは忘れることが出来ない。私は銃を持出した小室四郎を憎む気にはなれなかつた。古ぼけたこの三八式歩兵銃一挺が、かくも私を苦しめることが悲しかつた。このてつぼうは修理品として大隊本部へ送られそのま、だつた。

三、史家坪行 (昭和二十一年)

我々の警備する乱嶺関から史家坪までは約三里程あつた。下史家坪に八路軍が屢々出没するという情報を入手して、警備隊長衛藤軍曹は早朝出勤命令を發し、乱嶺関警察隊十五名と我々分遣隊十二名は身軽ないでたちで出發した。昭和十九年十月三十日のよく晴れた秋の日であつた。

下史家坪を西方から包圍し、二手に分れて部落に突入した時

は、大部分の部落民は既に逃走し僅かに残つた老翁や女達がうろろろしているだけだつた。部落は山に囲まれた盆地の底に二十戸程の荒れ果てた土壁の家を秋の明るい日差しに曝してゐた。此処で鶏を潰し馬鈴薯を蒸して昼食の腹を作つた我々は、更に南進して上史家坪に八路を追求してゆくことになつた。衛藤軍曹と小林伍長は脚の短い支那馬に跨り部隊を指揮して行つた。私はその日、三番で岡村上等兵と軽機関銃を交互に担いで進んだ。上史家坪に向ふ道路は両側から迫つてくる山塊を切り分けて蛇々として経めぐつてゆく。断崖は益々深く、仰ぎ見ると突兀とした岩塊が今にも転落しそうにのしか、赤茶けた岩肌に縋りついて危ふく生えている灌木は、黄色に、真紅に紅葉してゐた。下を覗くと所謂千仞の谿で奇岩怪石の河床を蒙彊には珍らしく澄んだ清流が白く岩を噛んでゐた。丁度、甲州の昇仙峡を五倍も十倍もしたような溪谷美の真央に立つて私は思はず嘆声を發した。「これは国立公園だ」と誰かが「今日は遠足だ」と言つた。成程遠足のような気分です。私は進んで行つた。討伐などといふ気持はみんな忘れて……。

照りつける秋の陽に軽く汗ば

んで上史家坪に着いたのは一時半頃だったろうか。上史家坪は来て見ると何のこと、僅か二軒ばかりのあばら家が断崖に引つか、つて転っている予想外の貧弱さであったので少からぬ期待を持って来た一同は大いに失望した。しかも追求して来た八路は影も形もなく此処から更に南方一里の草溝方面へ遁走したらしい。衛藤軍曹は通訳を通して土地の地理に明るい警士や密偵に、草溝の状況を頻りに訊ねていたが、やがて今日の行動は此処で打ち切る決心をした。処が鬚づらの小林伍長は持前の軽卒さから無暗と草溝進撃を主張した。こゝまで来てのめめと帰れるかと言った。軍曹と伍長は声高に争った。我々は既に一日の半分も過ぎたことだしこれから又敵のいると言ふ草溝までゆくことは、帰りの路の長さを思つてうんざりしていた。然し小林伍長は飽くまで南進を主張し、遂ひには警察隊だけを指揮して俺一人でゆくと言ひ出した。そこで軍曹もそれではと言つた時である。突然、谿間の静寂を破つて三四発の銃声が響いた。渡支以来初めての銃声を聞いた私は、突然のこと、て何処から撃つてくるのかと首を廻らしている、衛藤軍曹は何やら大声で喚きながら、問誤問誤

している私達を押し倒すようにして狭い崖道を後退して来た。隠れる隠れると言う声で私はやつと自分の危険を感じ、三尺の幅しかない崖道の山の側へ身をへばりつけた。弾は続いてつんざくような銃声と共に身近かへ突きささ、つて来た。私は初めて敵に謀られたと覺つた。然し敵は何処から撃つて来るのか分らなかった。背の高い李通訳は先頭に立つて大声で「山へ登れ、早く、早く」と叫んで右側の断崖を上り始めた。

二番の岡村上等兵は軽機を肩に、「早く早く」と私を促して断崖に取りついた。私は俄かに火照つて来た顔を更に赤くして岡村上等兵の後ろに続いた。普通では迎底登れぬと思ふ程切り立つた断崖を、草に掴まりながら登るのは空ら身で登るにも骨が折れ、まるで梯子を上るような断崖だ。草を掴むとポロポロと土がこぼれて来て、汗びつしよりの顔に気味悪くくつついた。而かも敵の弾は私を追つかけるように後からとんで来た。岡村上等兵の脚は私の頭の上でたどたどしく鈍つて来た。私は三番の役目上、元氣を出して「交代つ」と怒鳴り乍ら彼に追ひついて軽機を受け取った。軽機を肩にした私の心臓は急に早鐘のようにドキドキ鼓動し出した。

一足ふん張る毎に息が止るかと思はれた。顔は真赤に充血して目は眩んだ。頭はガンガンし出した。然し敵の追ひ打ち止まなかつた。それでもやつと息の休める平らみへ出た時、後を振り向いて見たが敵は全然見えなかつた。唯戦友達が全様息を切らし乍ら下から登つてくるのが、あちらの岩陰、こちらの草蔭に見え隠れしていた。誰やら古兵らしいのが「馬鹿っ！危いつ。右へ入れ、右へ!!」と叫ぶので私は再び身を伏せて草の中へ潜つた。上の方で李通訳が「もつと上へゆけ上へゆけ、何をしているのだ」と先頭に立っているのが葉越しに見える。「軽機！軽機!!」と叫んでいる。軍曹も伍長も戦友もなかつた。私は唯登る丈けに夢中であつた。軽機を再び岡村上等兵に渡して弾庫を引きずりながら登つた。弾庫を握つた拳は岩と土に擦れて血が滲んだ。私の眼はもう上も下も見なかつた。目の前の赤い岩肌と、風に光る薄の穂だけが目にちらつた。

突然、私の火照つた左の頬を異様な空気が走つた。そして左眼へ草の葉がつつと飛び込んで来た。私は思はず顔を右へ振つた。と、その時私の直ぐ前を登つていた岡村上等兵が「あつ」と言つて倒れた。彼の巻脚絆が横に倒れたのが私の眼に大きく映つた。彼は動かなかつた。私は急いで彼の身体に追ひつき「如何した!」と叫んだが彼は顔をしかめている丈けだつた。「やられたつ!!」私は自分も横に伏せて大声で下に向けて怒鳴つた、そして彼の傷口を見ようとしたが彼は手を振って触らせなかつた。傷は左脚の膝の後側であつた。丁度私の左頬をすれすれに飛んで来た弾が、彼の左脚に突きささ、つたのである。ほんの一寸の差で私は頭を貫かれることから免れた訳であつた。やがて下から宮下衛生兵が這いずり上つて来て手当をした。ズボンの膝を剣でズバリと裂くと真白な袴下に血が一面滲み出していた。宮下衛生兵は私に、軽機を持って登れと促すので私は岡村上等兵を捨て、又登り始めた。隊長衛藤軍曹は高い処から速く上つて来いと頻りに怒鳴っている。然し焦れば焦る程脚はすくんで上れない。私は図々しさを極めこんで横になつて息を休めた。すると下方の稜線でバリバリと友軍の軽機が鳴り出した。見返ると小林伍長が軽機を稜線に据えて対岸の山腹目がけて撃つている。「いるぞ!いるぞ!」と叫んでいる。私は好奇心に駆られてずるずると稜線へ上つて行つた。やつと

稜線に辿りついて岩陰から前方を見ると谿間をへだて、二百米ばかりの対岸の山腹に敵らしき黒い影が見える。然し私にはそれが判然と敵であるかどうかは判らなかつた。一等兵しかも補充の老兵である私にはまだ軽機を撃ちまくる自信はなかつた。丁度近くにいた長谷川古年次兵に軽機を渡すと、私はホツとして空ら身で又山を上った。頂上に着いた警士達は高い所から敵を目がけて小銃を撃っていた。李通訳が拳銃を握って岩角からねらっている姿はまるで西部劇の二コマのようであつた。

戦闘は約一時間半ばかり続いた。然しいくら撃ち合つて見ても両者は越えることの出来ない深い谿を隔て、いるので結局は勝負がつく訳ではない。八路军は我々が行くのを山の上で待ち構えていたのである。若しお調子者の小林伍長の言の通り深入りして南進していたら、それこそ罠にかつた兎で我々は全滅の悲惨事に陥つたであろう。警備隊長衛藤軍曹も一人の犠牲者を出して流石に責任を感じたらしく何時もの激越な態度もなく口をつぐんで萎れていた。

岡村上等兵は真青な顔色をして支那馬に乗せられて遙か後方から追求して来た。秋の日が漸く沈もうとする頃私達は重い足

を引きずりながら山腹の細い路を乱嶺関へ向けて急いでいた。

著者の紹介

高田掬泉(本名 喜久三)氏は明治四十四年(一九一三)小田原万年町(現在浜町)に生を受け、小田原商業学校を卒業後、家業の材木商を継ぐ。昭和一九年(一九四四)召されて北支で従軍、復員後材木商を廃業し、執筆活動に入る。昭和五十年(一九七五)には俳誌『こよろぎ』を主宰、『俳句の世界』、『大正小田原万華鏡』など著書多数。

没後の平成十年(一九九八)には山つとむ氏が掬泉氏の随筆をまとめた『明治小田原太平記』を刊行している。

また、俳句のみならず俳画もよくされ、独特の線と趣のある温かい絵を多く描かれている。掬泉氏はその半生を小田原の文化進展に尽くされ、平成十年(一九九八)八十七歳の生涯を閉じられた。(早川初枝)

落穂集

梅雨時とも思えない猛暑、夏が駆け足でやってきた。

高校野球夏の甲子園大会、長崎、広島の原因、そして今年も平和を誓った八月十五日がめぐって来る。

二〇世紀は戦争の世紀だったと言われ、新しい世紀に平和への期待は大きかった。しかし前世紀の後遺症か、いまだに軍靴の響きは鳴り止まず、世界中で、市民までも巻き込んだ別な形の陰惨な戦争が行われている。

日本でもイラクに派遣される自衛隊員とその家族との別れ、輸送艦船、航空機、装甲車、戦地で、日の丸をつけ、武装した自衛隊員、大儀は違つてもこんな光景を五十九年ぶりに見た。

今回一九八号は「語り継ぐ平和への願い」をメインテーマとして、身近に起きた戦争の悲劇、そして平和への尊さを語り

継ぐ一助としたい。幸い、貴重な体験をお持ちの方々に、勇気を持って、忘れてはならない「その時私は…」を執筆していただいた。

戦中、戦後の体験は、思い出したくもない筆舌に尽くせないことばかりである。でも悲劇を繰り返さないために、次の世代の人たちに平和な時代を築いてもらうために、勇気をもって書き残し、語り継ぎ、その役目を果たさなければならぬ。

五月に第二の故郷「大連」を五十七年ぶりに訪づれ、かつての住いを探してみた。隣の「旅順」では二〇三高地など日露戦争の戦跡を巡った。今、中国人の手で見事に保存、展示されていた。その説明文の末尾に『前事不忘 后事之師』とあったのが印象的であつた。

(編集子 植田博之)

本誌一九八号では頁数の都合で、連載中の四編を次号以降にさせて戴きました。ご了承下さい。

次号は郷土の自然をメインテーマに十月発行の予定です。原稿締め切りは八月末です。奮ってご投稿下さい。

(公報委員会)



限りある
いのち
見やりつ
年迎ふ

掬泉

片岡日記 ③〇

片岡永左衛門

大正十四年九月

一日 晴

今日ハ二百十日之危日ナ
ルニ好晴。殊ニ本年ハ雨
多ナリシニ此程ノ暑氣統
キニテハ稲作も見直すへ
し。午前出勤午後牧野林
従妻君病死ニて会葬。午
前出勤。十一時過キ退出。
帰宅ノ途中読経ノ音声鉦
鼓木魚ノ音所々聞ユ。婦
宅佛壇ヲ拜スレハ梨実二
個、線香三束、飴を供へ
タリ。細君曰ク梨ト線香
ハ小学同級生ノ物代式人
持参シ泰子ノ佛前ニ供
へ、飴ハ飴売り来りたる
も今日ハ震災を記念の意
味にて断しも、又施物ノ
意味にて、呼返し買求て
供へしと。震災ノ時刻ニ
記念ノ爆音天空ニ響ク。
暫ク黙禱す。夕食ニ向へ
ハ、今日ハ記念ニ三食香
物ノ筈なるに、鱈の塩焼
有リ。細君曰ク、二三日
来らざる魚商当家を当ニ
し持参したれハ、買しと
理ケ種々ありと笑ふ。震
災を回顧すれハ人ハ云
フ。復興遅々と然共各個

人ノ努力ニハ顧て申分な
く、返て意外ノ感なき不
能も官廳筋殊ニ町当局ハ
不真面目にて議する処無
ニ非るハ遺憾多きも、國
縣道ノ擴張ハ追々遅々な
がらも出来し、其完成ノ
ヶ所ハ面目を一新し、他
郷の者ハ其美観ヲ旧時ニ
比し賞譽するに至れり。

二日 晴

出勤小田原実業銀行ハ帳
簿整理を名とし、三週間
休業す。同行ハ小田原、
小田原通商、國府津、曾
我等四行ノ後身ニテ此休
業ハ予定事実ニテ震災前
ヨリ不詳ナリシニ、震災
ノ為メ預金ノ引出し多ク
独立ノ能力を失し、合併
シタルモ経営者其人ヲ不
得、返テ信用ヲ欠キ既ニ
昨年閉店スヘキ運命ナリ
シニ、小田原町ノ公金ヲ
取扱ヘル為メ復興資金ノ
預入ニ依リ命脈ヲ維持し
四苦八苦ナリシハ、気毒
ノ極にて此為ニ非常ノ苦
境ニ落入シハ小田原町に
て、総額九十七万円ノ多

額ナル預金ニテ、復興も
頓挫すへし。そニ依リ、
今井町長ニハ種々ノ流説
種々ノ非難有も、畢竟氏
ハ金融業ノ事情ニ疎かり
しと。自己を過信し、職
責を誤解し功利ノ念強キ
為ニ、銀行重役等におか
み倒されタルニテ、余も
昨年暗ニ注意セシモ最早
遅ク、時期ヲ失セル為カ
意ニも留ざる様なりしか
晩年ニ及ひ此事有リ。如
何ニモ平素ノ親交より同
情シ不堪、川たちハ川ニ
はつるの狸うぬニテ、止を
得ず。小田原実業ノ休業
ハ町ノ諸業ニ甚大影響ヲ
与へしか如ク、川北ト云
名古屋商人ハ毎度呉服物
持来り尾崎ニ止宿し、品
物ヲ陳列し当地呉服商人
ニ通知し取引なし来り。
本日も其如ニナシ諸居ニ
通知し電話にて懇請セシ
モ、漸ク夕刻ニ至り片野
一人来りし己ナリと是ニ
テ一凡ヲ知り得へし。

② 川たちは川で果てる
。技のある者は、そのため
かえつて身をほろぼす

三日 雨

出勤、十時より本店ニ行、
七時帰、疲労す。小田原

町役場ハ実業休業ニテ、
進退極り、俸給仕拂止不
得復興等ノ資金借入諸願
ニ助役、議員登廳ス。

四日 雨

本店より三留、山下兩人
来り共ニ承諾請求之件ニ
テ宮ノ下行く。兩人と別
れ温泉村長并ニ大平台預
金者代表者ヲ訪問、六時
半、疲労シテ帰宅。

五日 半雨

出勤

六日 晴

午前六時発ニテ小八幡本
多ニ至り、帰途大見寺に
寄り元禄震災の記録を借
る。午後より正田氏ニ往
訪、トンコウ発掘石佛ノ
写真ヲ見る。大ニ得る処
あり。

七日 晴

午前預金者訪問、午後在
宿。休業中ノ小田原実業
銀行も種々波乱有リ、株
主ノ協議ノ結果、重役ニ
辞職ヲ迫ルヲ決議ス。普
通考ニテハ、只サハ此際
ハ悦テ辞スヘキヲ、人ニ
依リ考ハ相違スル者ナ
リ。斯如ナレハ、急ニ開

業も六ヶ敷クナルヘシ。
八日 晴

九日 晴雨

明日箱根筋各村ニ出張ノ
為郡長ニ面会。

十日 雨

預金者承諾請求ノ為メ温
泉宮城野仙石各村長ニ面
会、強羅にて昼食。四時
半帰宅。

十一日 風雨

本日ハ二百廿日ナルモ格
別の事ナシ。

十二日 晴

午後より宮ノ下安藤氏ニ
行。仙石氏ニ立寄、四時
半帰宅。

十三日 晴

相不変預金者一、二訪問。

十四日 晴

藤沢本店ニ行。三時帰宅。
去十日当町花柳界第二指
定地として緑町二丁目藪
幸田を神奈川縣廳より許
可アリ。来る廿四日ヲ限
リ、旅館ト料理屋の兼業
ヲ禁セラル。
(解説・編集 勝俣淳一郎)

講演会記録

小田原史談会回顧



三津木 国輝

私が小田原史談会創立にかかわったのは、二十一歳でした。郷土文化館に勤めていた時でした。久野東泉院の岸老師にお会いして思ったことは、史談会創立当時の生き残っている人は、田島の杉崎正五さん(96歳)、東泉院の岸達志さん(79歳)、私(70歳)の三人となったことです。感慨一入です。

昭和三十年一月二十日、郷土文化館が誕生しました。開館すると、関係者がよく集まってきました。自然科学の松浦茂寿さん、俳人でも有名な立木杜天(望隆)さん、小田原高校の先生だった画家の湯川治郎さんや加藤誠夫さん、この人は金子の最明寺の御曹司でした。

夏に入ると、長谷川英磨さん、県会議員の甥御である城所晋さん、原助役の伯父で北原白秋の友人でもあった中村雅治さん、獣医の灘波明さん、本町の正恩寺の鞠川康英さん、この人たちは、大休昼休みによく見えられました。

そんな人たちの話の中から、

小田原史談会立ちあげの話が出てきました。「それでは郷土文化館に協力する会を作ろう」ということになりました。主な顔ぶれは(前記の他に)井上英一さん、内田武雄さん、落合信一さん、川口潤一郎さん、岸達志さん、清水専吉郎さん、杉崎正五さん、鈴木顕弘さん、中野教広さん、板橋の刀剣研究家・橋本庄平さん、鴨宮の蓑田長平さん、久野留場の山田一郎さんなどでした。

昭和三十年七月二十八日に発起人会を開いて、名称を小田原史談会と決定し発足しました。会長には飯泉山主・峯堅雅さん、顧問は市長の鈴木十郎さんをお願いすることになりました。会長依頼の交渉委員として、岸さん、滝口さん、立木さんが就任されました。

顧問依頼の交渉には、ある人が就任しましたが話の中で「全面的に協力する」とのことです。「会長をやってくれ」とまで話は進んでしまいました。

そのため会長二人になってし

まいましたので、岸さんが「私が話しておく」ことになり、結局会長・鈴木十郎さん、顧問・峯堅雅さんに落ちつきました。

そしてスタートしたわけですが、中井一郎さん、山口武利さん、酒井忠次郎さんの県会議員三人に参与をお願いしました。早速史跡めぐりをしましたがバス三台という大勢の参加者でした。鈴木市長は朝七時出発に見送りに見えました。以後の史跡めぐりには必ず見送りに見えられたほど熱心でした。

史談会が充実・発展していくために、各地区に支部を作ろうということになりました。昭和三十一年から三十二年にかけて、小田原史談会の支部ができていきました。

久野史談会が、立木望隆さんや山田一郎さんなどによってできました。井細田・多古に城北史談会が出来て、会長は中野教広さん。下府中史談会は 蓑田長平さんが会長、桜井史談会は会長に井上英一さん、田島史談会は杉崎正五さん、橘地区は竹見龍雄さん、片浦・江之浦地区は松本孝作さん、大窪史談会は市川将貴さん、豊川史談会は沖津徳蔵さん、南町史談会は東海俊美さん、下曽我史談会は風月堂の神保圭介さん、高田地区は内田武雄さん、国府津地区は落

合信一さんが、それぞれ会長を務めていました。

こんなに支部が増えました。総勢七百二十人という大世帯の小田原史談会になったんです。

そこで各地区の民具・土道具、各家庭にある古い物を集めて展示する「我楽多展」を催しました。展示するものは郷土文化館に持ち寄ることになったんです。

南町史談会の東海俊美さんは、五〇〇点以上も集めて持ってこられました。後にこれを市に寄付されました。このように成果は大きく、市としても非常にありがたかった「我楽多展」でした。我楽多展は郷土文化館に集まってくる人の好意によるものが多かったという特徴もありました。展示品の照明は、工学院大学の関重磨先生ご好意の設計によるものでした。

昭和三十一年三月、最初に最後の「仏像仏画展」をやりました。史談会と寺院団体・小田原市の、三者による共催でした。各お寺のご本尊や仏像・仏画を持ち寄って展示したこともありました。この中に、高田地区の東学寺のご本尊があつて、京都嵯峨の清涼寺式の釈迦で、神奈川県指定の文化財となった貴重なものもありました。史談会として多くの人が活発に動いた催しものでした。

昭和三十三年の千代庵寺跡の調査も、活動した一つです。県と小田原市との共催で、東大や日大・横浜国大が参加した大がかりの調査でした。法隆寺の管理事務所長であった大岡実博士と、日大の軽部先生、県の赤星直忠先生などのメンバーで、発掘調査が行われました。結果「礎石が少ないけれど、奈良時代に大寺院があったことがわかった」のみで調査は終わりました。史談会は全面的に協力し、毎日誰かしらの役員が参加していました。

小田原城完成記念講演会も盛大でした。昭和三十五年のことで、講師は東京工業大学の藤岡通夫先生と、城郭研究の権威者の東北大学・大類伸先生の二人でした。日本城郭史における小田原城の重要さを、市内外の人々に知らしめた有意義の講演会でした。

史談会の一〇〇号会報に書きましたが、昭和三十六年三月十五日、記念すべき小田原史談会第一号の会報が発行されて、高い評価をうけ好評でした。

この時まで、私は事務局(史談会)の仕事もしていました。市の人事異動によって、郷土文化館を去ることになりました。史談会では、送別会を盛大にやってくれました。県会議員三人や

市会議員が六人、市長も見えられました。一介の事務員に対して、それ程の厚意をよせてくださり、感激したものです。

昭和四十三年六月に、会報編集第一号発行。

四十六年には北条氏康没後四百年記念講演会と展覧会が行われました。これに参加したのは、史談会で立木望隆さん只一人でした。

立木さん曰く「史談会が初志の目的を忘れて、史跡めぐりや会報のみである。この辺で市から分離して、一人歩きた方がよい」

これが通って昭和四十七年一月二十日、事務局は市から離れて広沢伊助氏宅となりました。昭和五十三年四月には事務局を沖山敏子宅に移しました。

昭和五十年七月に、小田原史談会創立二十周年記念特集号を発行しています。五十六年には編集第二号を発刊し、好評でした。

史談会運営について、歴史の専門的な知識をもつ人たちの意見を聴くべく、専門委員会を設置しました。文化史で長谷川英磨さん、美術で湯川治郎さん、工芸関係から宮之原武夫さん、考古学の分野では加藤誠夫さんと立木望隆さん・内田武夫さん、刀剣類に関しては橋本庄平さん

が任命されました。初代会長、鈴木十郎さんは、五期十一年間熱心に務められ、あとをついだのは井上英一さんでした。

その後、中野敬次郎さんが会長に就任されました。中野さんはそれまで会員でなく、一線を画していたようです。後半に見直されて、会に入りたいきさつがあります。前後十三年間、

会長に就任され、史談会運営のために非常につくされました。中野会長のあと、杉崎正五会長となり、そば屋の相沢英一さん、高田掬泉さん、千代の富田千春さん、岡部忠夫さん、山口一夫さんが会長になりました。

平成十五年から小野意雄さんが会長となり、今に至っております。

(文責 石綿 勉)

その2 小田原史談会歴代会長

昭和30年7月~41年3月	鈴木十郎
41年4月~44年3月	井上英一
44年4月~48年3月	中野敬次郎
48年4月~53年3月	井上英一
53年4月~62年3月	中野敬次郎
62年4月~63年3月	杉崎正五
63年4月~平成2年3月	相沢栄一
平成2年4月~6年3月	高田喜久三
6年4月~10年3月	富田千春
10年4月~12年3月	岡部忠夫
12年4月~15年3月	山口一夫
15年4月~現在	小野意雄

編集者提供資料1

- 昭和30年7月28日
- 10月
- 昭和31年~32年
- 昭和31年3月
- 35年6月3日
- 36年3月15日
- 43年6月25日
- 46年10月
- 47年5月30日
- 50年7月18日

小田原史談会のあゆみ

- 小田原史談会設立発起人が開会され、直ちに発会。
- 第一回史跡めぐり(市内)を実施、以後年数回実施する。
- 各地区に支部が結成される。
- この頃各支部で我楽多展が開催される。
- 小田原市連合寺院団と共催で「仏像・仏画展」を開催する。
- 小田原城完成記念講演会を実施。
- 機関紙「小田原史談」を発刊、現在197号が発行されている。
- 小田原史談特集第一号発刊。
- 郷土文化館・天守閣と共催で、北条氏康没後四百年記念展覧会を開催する。
- 小田原史談特集第二号発刊。
- 小田原史談会創立二十年記念特集号発刊。

平成16年度

総 会 報 告

小田原史談会

○日 時	平成16年4月24日(土) 13時30分開会
○場 所	小田原市民会館第7会議室
○総会次第	(省略)
○講 演 会	講師 三津木国輝氏(小田原市文化財保護委員) ★「小田原史談会回顧」
○懇 親 会	

平成15年度事業報告

- 総 会 4月26日(土)小田原市立図書館 12月13日、14日両日の参観者……名簿上は126名
講演会「江戸時代小田原地方の酒について」 「小田原史談」の残部から見た参観者は200名
講 師 瀬戸 崎雄氏 当日を含めた予算執行状況は次のとおり。
- 研修委員会 「市文連」へ提出した予算合計……49,800円
5月15日(木)栄町浜町方面 講師鳥居泰一郎氏 参加者22名
6月10日(木)厚木海老名方面 参加者37名
9月27日(土)足利学校方面 参加者55名
11月6日(木)～7日(金)奈良方面 参加者33名
1月15日(木)谷中七福神他 参加者49名
- 会報委員会「小田原史談」194号～197号編集発行 53,297円
ク 決算報告……53,297円
全額「市文連」から配当された。
別途、協働金として配分された30,000円は、一般会計に繰
入れた。
- その他
会員名簿発行
総集編第3、4巻の販売
幹事会、役員会開催
曾我傘焼き祭、北条氏政・氏照公墓前祭、久野古墳慰霊祭
役員参加

平成15年度一般会計決算報告

16年3月31日

支出の部

単位 円

項 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減	摘 要
総 会 費	49,000-	29,840-	▼19,160-	次回前金を含む
会 議 費	110,000-	134,941-	24,941-	
連 絡 費	25,000-	25,098-	98-	
会報送費	80,000-	60,882-	▼19,118-	
交 際 費	45,000-	44,100-	▼900-	
慶 弔 費	20,000-	3,000-	▼17,000-	逝去により返金
事務用消耗品費	14,000-	9,933-	▼4,067-	
振込手数料	2,000-	910-	▼1,090-	
宛名ラベル	25,000-	21,535-	▼3,465-	
研修委員会費	10,000-	0-	▼10,000-	別途特別会計
語り部委員会費	20,000-	20,636-	636-	
会報委員会費	20,000-	24,260-	4,260-	
会報印刷費	1,320,000-	1,386,000-	66,000-	
会員名簿印刷費	55,000-	52,500-	▼2,500-	
積 立 金	50,000-	50,000-	0-	総集編用
予 備 費	31,480-	14,700-	▼16,780-	会員募集ビラ等
ロッカー借用費	0-	9,600-	9,600-	サポートセンター2個
合 計	1,876,480-	1,887,935-	11,455-	

収入の部

単位 円

項 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減	摘 要
前年度繰越金	105,480-	105,480-	0-	
預 り 金	0-	57,000-	57,000-	前納会費 *
会 費	1,200,000-	1,326,000-	126,000-	442名分 **
賛 助 会 費	570,000-	550,000-	▼20,000-	51団体分 ***
預金利子他	1,000-	42,010-	41,010-	利子、寄付
合 計	1,876,480-	2,080,490-	204,010-	

* 前納会員13名 **未納会員3名 ***未納団体2

上記の通り、一般会計決算報告をいたします。残額は平成16年度予算に組み入れます。平成16年4月2日 会計委員 植田博之 印

会計監査の結果、一般会計、特別会計共に帳簿、領収書などは適切に処置されていたことを報告します。

平成16年4月2日 監事 佐久間俊治 印 監事 鶴井道泰 印

総会議案は満場一致で可決されました。
講演会の後に、会員、役員と共に懇親会を行い、50周年記念事業等を話題に楽しいひと時を過ごしました。
(総務委員会)

15年度収支決算：収入2,080,490円・支出1,887,935円・残額192,555円

平成16年度一般会計予算案

平成15年度 総集編・積立金特別会計報告

16年4月24日
単位 円

収入の部

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	摘要
前年度繰越金	192,555-	105,480-	87,075-	
預り金	30,000-	0-	30,000-	前納会費10名分
会費	1,320,000-	1,200,000-	120,000-	440名分 ※
賛助会費	500,000-	560,000-	▼60,000-	※※
預金利子他	1,000-	1,000-	0-	寄付、利子
合計	2,043,555-	1,866,480-	177,075-	

※前年度実績により増、※※申告、推定により減

支出の部

単位 円

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	摘要
総会費	120,400-	49,000-	71,400-	※
会議費	110,000-	110,000-	0-	
連絡費	25,000-	25,000-	0-	
会報発送費	80,000-	80,000-	0-	
交際費	45,000-	45,000-	0-	
慶弔費	20,000-	20,000-	0-	
事務用消耗品費	14,000-	14,000-	0-	
振込手数料	1,000-	2,000-	▼1,000-	
宛名ラベル	25,000-	25,000-	0-	
研修委員会費	10,000-	10,000-	0-	別途特別会計
語り部委員会費	53,500-	20,000-	33,500-	新規事業実施
会報委員会費	25,000-	20,000-	5,000-	
会報印刷費	1,260,000-	1,320,000-	▼60,000-	30頁×4回に減
会員名簿印刷費	0-	55,000-	▼55,000-	※※
予備費	50,000-	50,000-	0-	別途特別会計
ロッカー借用費	7,200-	0-	7,200-	サポートセンター2個
積立金	30,000-	31,480-	▼1,480-	会員募集ビラ等
合計	1,876,100-	1,876,480-	▼380-	

※従来の総会形式を変更、場所代、懇親会費を含めて予算化。
※※諸般の状況により、隔年(役員改編年)発行とし、会員移動は都度会報に掲載。

区分	収入額	支出額	摘要
前年度繰越金	585,134-		
本会計より繰入	50,000-		
総集編 No 3	16,600-		2,000×2 1,800×7 } No3
No 4	21,000-		
普通預金利子	2-		2,500×3 2,250×6 } No4
繰越金		672,736-	
計	672,736-	672,736-	

神奈川県信用農業協同組合 普通預金 ￥472,736-
定期預金 ￥100,000-
定額郵便貯金 ￥100,000-

総集編

No	期首在庫	販売	期末在庫の明細	
			(No 3)	(No 4)
No 3	120部	9部	アメリカヤ 91	12
	111部		アオキ画廊 12	2
	271部	9部	伊勢治書店 3	3
No 4	262部	9部	八小堂書店 3	3
	262部		平井書店 2	2
			アルファ 0	240
計			111部	262部

総集編積立金特別会計担当 武田敏治

平成15年度 研修委員会会計報告

月日	方面	収入(円)	支出(円)
	前年度繰越金	452,059	
4/26	講演会謝礼他		22,022
5/15	栄町～浜町方面		22,600
6/10	厚木海老名方面	160,000	169,550
9/27	足利学校方面	330,000	302,078
11/6～7	奈良方面	990,000	998,993
1/15	谷中七福神他	210,000	209,663
	雑収入	20,000	
	利息	4	
	合計	2,162,063	1,724,906

残額437,157円来年度に繰越します。

担当 勝俣淳一郎

平成16年度事業計画

平成16年度 事業方針

本年度の基本的性格と方針

(1)基本的性格

平成17年度は、小田原史談会の創立50周年の年度であり、本年度は、その前年に当たり、創立50周年記念事業の企画・立案・準備並びにプレ事業の実施の年である。そこで、会員相互の交流と親睦を深めつつ、諸事業活動の充実化と活性化を図りたい。あわせて、内外に史談会の活動の周知を図りたい。

(2)創立50周年記念事業について

企画・立案は、常任幹事会で対応し、準備並びにプレ事業の実施は役員会で対応する。事業内容によって、実行委員会を役員会の議を経て設置することも考えたい。

平成16年度 研修計画

- 1) 4月24日(土) 総会講演会 講師 三津木 国輝氏
- 2) 5月10日(月) 会報掲載
- 3) 6月8日(火) 横浜方面へ
総持寺、横浜市歴史博物館・大塚歳勝土遺跡公園、山手の洋館(旧内田家住宅、エリスマン邸他)
- 4) 9月29日(水) 清水市方面へ
蒲原宿 古い町並み
清水次郎長の史跡(梅蔭寺、生家他)
日本平 久能山東照宮
- 5) 11月18日(木)～19日(金) 土浦、佐原方面へ
18日 土浦城跡亀城公園、土浦市立博物館、予科練記念館他
19日 佐原の町並み、伊能忠敬旧宅、香取神社他
- 6) 17年1月15日(土) 初詣 東京方面へ
港区七福神めぐり、 有栖川宮記念公園、浜離宮恩賜庭園他

会報委員会 16年度計画

事業計画

会報発行 第198号30頁(16年7月)語り継ぐ、平和への願い
第199号30頁(10月)小田原、足柄の自然
第200号30頁(17年1月)200号記念特集『史談』の歩み
第201号30頁(3月)古老に聞く(語り部委員会共働)

平成16年度「語り部委員会」事業計画

小田原の年中行事について、話し合う会を企画する。

盆の行事、節句の行事、祝いの行事、祭典の行事などのうちどれをとるかなどは、委員会を持って計画していく予定。

参考にしたいものは、曾我の西山銈太郎氏が「小田原史談」に掲載された「我が郷土の我が家の年中行事」である。

実施予定日…平成16年10月17日(日)

市文連の行事である市民文化祭行事に参加する形で行いたい。

参加予定者…会員のほかに広く市民に呼びかけて、多くの人の参加を期待している。

企画運営……語り部の委員が行う。

総務委員会 16年度計画

事業計画

会議等の開催

役員会	第1回	4月中旬	会費集金	総会役割分担等
〃	第2回	4月24日	11時～	総会準備、(展示、掲示)
総会		4月24日	13時30分～	総会、講演会、懇親会
幹事会	第1回	6月	50周年記念事業	立案
役員会	第3回	7月	各委員会 報告、審議	198号の配布 賛助会費集金
〃	第4回	10月	各委員会 報告、審議	199号の配布 他
〃	第5回	1月	各委員会 報告、審議	200号の配布、新年会 他
幹事会	第2回	2月	17年度計画	役員改選 審議
役員会	第6回	3月	17年度計画審議	201号の配布

平成16年度 第1回史跡めぐり実施報告 “早川上水を歩こう”

見学
スナップ

上水取水について



お堀流入口にて



緑町公民館にて話を聞く

5月10日(月)あいにくの雨の中でしたが参加者19名全員元気に歩きとおしました。雨でしたのでそれぞれの場所での説明は簡単にし、緑町公民館での昼食後約1時間資料をもとに石井啓文さんのお話を聞きました。みなさんご苦労さまでした。

第3回史跡めぐりご案内 “清水次郎長をもっと知ろう！”

～蒲原・清水方面へ～

1. 期日 9月29日(水) 小田原駅前(東口) 午前8時20分集合 雨天決行
(東海道の昔の面影が見られます)
2. 日程 小田原駅前出発(8:30)～東名～蒲原宿(10:45～11:30)～昼食(12:00～12:45)
(次郎長の墓、記念館があります)
ばいんじ
 ～梅蔭寺(13:00～13:40)～次郎長生家(車窓)～三保の松原
(眺めがすばらしい) (極彩色の建物がすごい)
 ～日本平～東照宮(14:30～16:00)～東名～小田原駅前着(18:15)

清水次郎長にはどんなイメージを持っていますか？ 浪花節、映画等でできた姿からほんとうの次郎長の姿をさがす旅に出かけませんか。多数のご参加をお待ちしています。

3. 会費 7,000円(昼食は弁当ではなく、しみず鮮魚センターでいただきます。)
4. 受付 9月14日(火) 午後2時より 伊豆箱根トラベル小田原営業所にて
 (23-0266)
 史談会担当 勝俣 (34-3939)

第4回史跡めぐりご案内 土浦・佐原方面へ(1泊2日の旅)

期日 11月18日(木)～19日(金)

主な見学場所 18日(木) 土浦城跡、土浦市立博物館、予科練記念館 他
 19日(金) 佐原の町並、伊能忠敬旧宅、香取神宮 他
 くわしくは次号で紹介します。ふるってご参加ください。

特別賛助会員

暑中御見舞申し上げます

平成十七年 盛夏

小田原史談会 会長 小野意雄

辰寿堂スポーツ
 高木整形外科医院
 手打^{そうぼん}小田原城趾前 田毎
 網元^{直営} 交る 海
 ㊦ そびそ二 宮
 茶半家具株式会社
 ちん里う本店
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原支社
 トーホー建物 齏
 割烹料理^{うなぎ} 烏かつ楼
 和菓子 菜の花
 日本金属工業 箱根保養所
 八 子 マ サ
 平 井 書 店
 (有) 古 屋 花 店
 株式会社 報 徳
 建築金物(株)星崎仲吉商店
 家庭金物
 本 多 時 計 店
 栄 町 松 坂 屋
 学生専科 ㊦ マルク
 諸星運輸グループ
 曾我の梅干^{塩辛・かまぼこ} 美の政
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 飛 鳥 屋
 紳士服の アメリカヤ
 (株) アルファ
 税理士 石原和夫事務所
 伊 勢 治 書 店
 株式会社 エントー
 ㊦ かまぼこ
 (株) オクツ 薬 局
 ㊦ 小 田 原 ガ ス
 小田原報徳自動車
 かまぼこ 籠 清
 (株)カネボウ化粧品小田原工場
 神尾食品工業 齏
 かみやま小児科クリニック
 興 電 社
 小 伊 勢 屋
 国 府 津 館
 (有) 小 松 石 材 店
 COMTEC コムテック株式会社
 さがみ信用金庫
 趣味のこふく さくらい
 箱根湯本温泉 春光荘
 雀のお宿
 小田原 ㊦ 秀考のかまぼこ

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円
〇〇二〇三二六四三三三六
小田原史談会